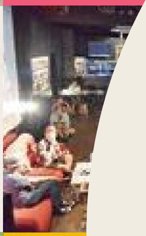
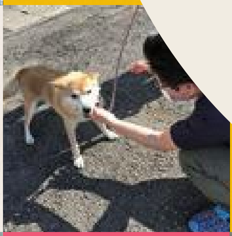
平成29年度

ふるさと･きずな維持･再生支援事業

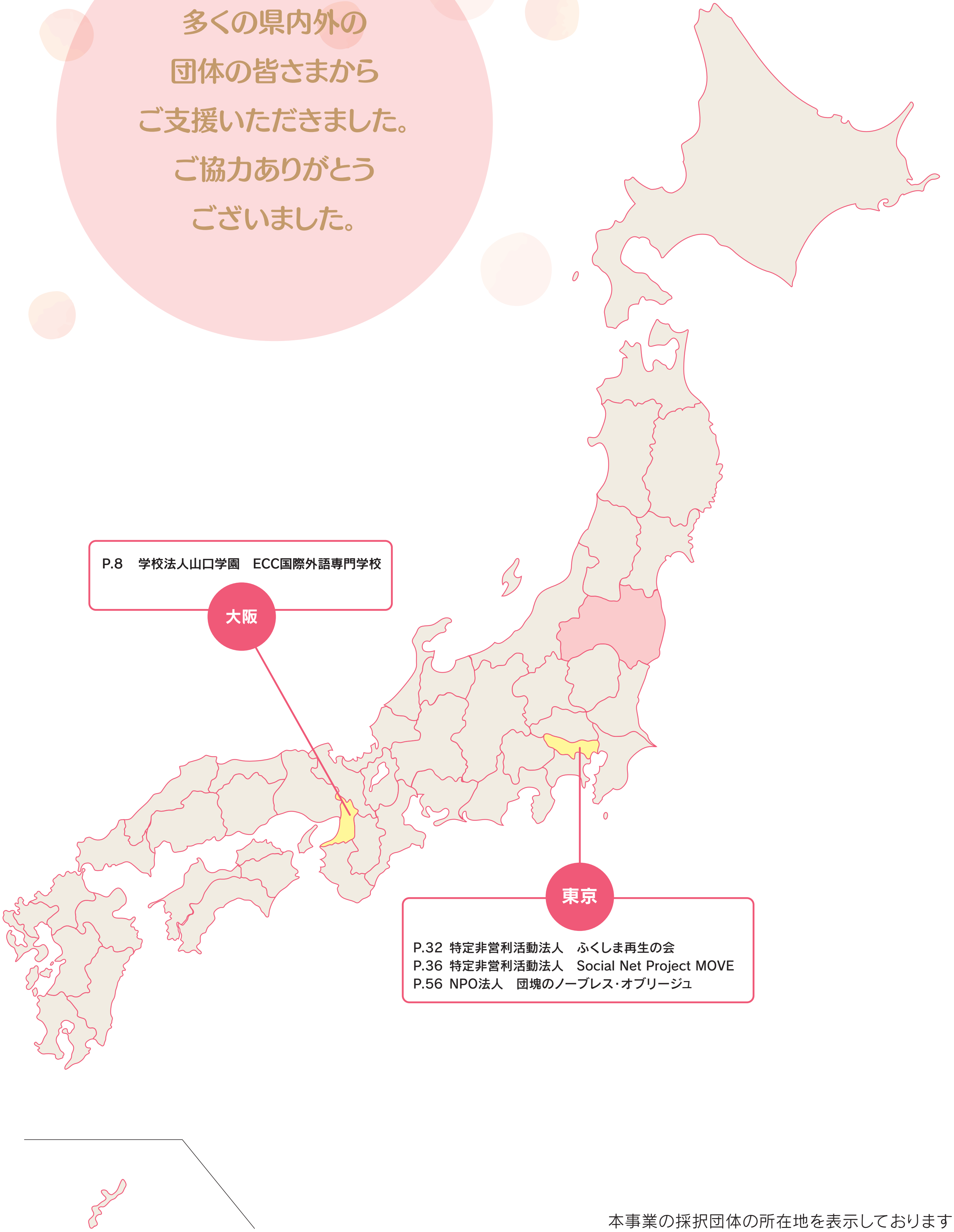
活動成果報告書





福島県

多くの県内外の
団体の皆さまから
ご支援いただきました。
ご協力ありがとう
ございました。



本事業の採択団体の所在地を表示しております
（補助金交付決定時点H29.6.1）

福島市
P.14 特定非営利活動法人　元気になろう福島
P.16 いいたてまでいの会
P.18 特定非営利活動法人　ふくしま飛行協会
P.20 一般社団法人　ふくしま連携復興センター
P.24 特定非営利活動法人　SORAアニマルシェルター
P.42 特定非営利活動法人　市民公益活動パートナーズ
P.46 NPO法人　ふくしま30年プロジェクト
P.60 特定非営利活動法人　シャローム
P.62 特定非営利活動法人　プロジェクトFUKUSHIMA
P.64 一般社団法人　Bridge for Fukushima

二本松市
P. 6 特定非営利活動法人　福島やさい畑～復興プロジェクト
P.26 特定非営利活動法人　がんばろう福島、農業者等の会
P.52 特定非営利活動法人　福島県有機農業ネットワーク

伊達市
P.58 特定非営利活動法人　りょうぜん里山がっこう

川俣町
P.10 NPO法人　かわまたスポーツクラブ

会津若松市
P.22 特定非営利活動法人　未来ノチカラ

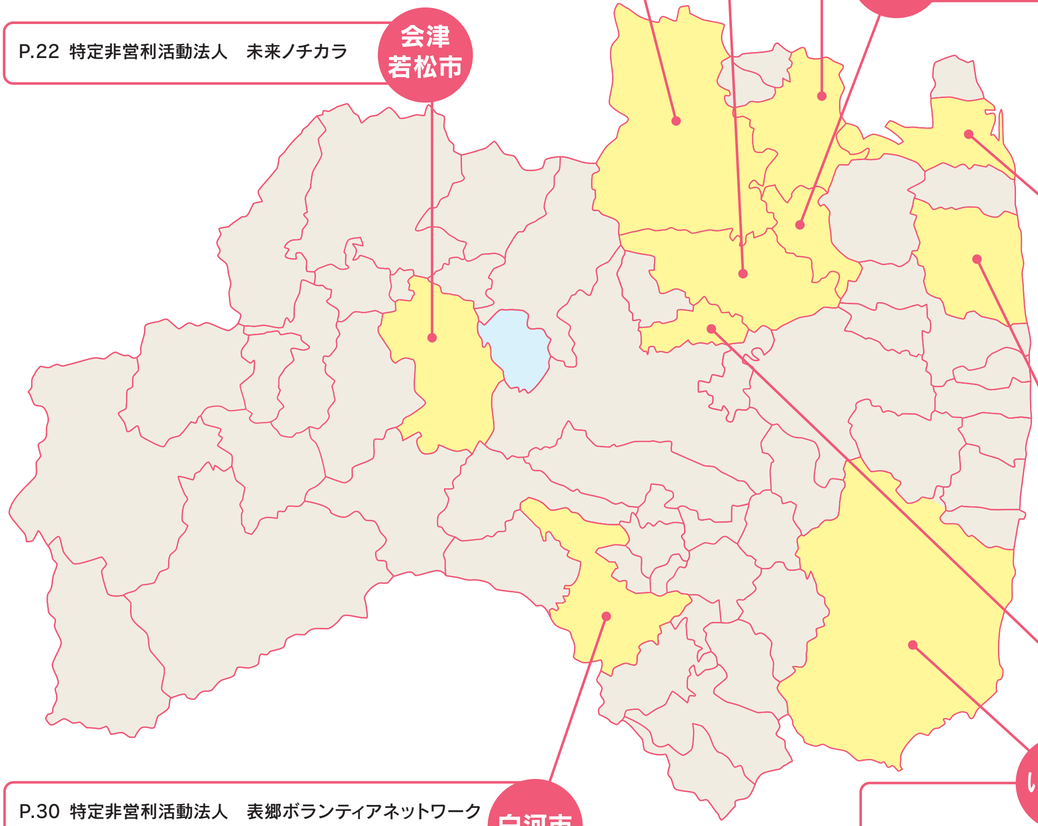
相馬市
P.28 特定非営利活動法人　フー太郎の森基金
P.40 特定非営利活動法人　相馬はらがま朝市クラブ

南相馬市
P.12 特定非営利活動法人　南相馬サイエンスラボ

本宮市
P.38 特定非営利活動法人　ふたば創造未来塾

白河市
P.30 特定非営利活動法人　表郷ボランティアネットワーク
P.44 特定非営利活動法人　白河花里倶楽部

いわき市
P.34 特定非営利活動法人　中之作プロジェクト
P.48 特定非営利活動法人　ツークンフトロカール
P.50 特定非営利活動法人　Wunder ground
P.54 久之浜・大久地域づくり協議会



ふるさと・きずな維持・再生支援事業について「ふくしま復興ステーション」からご覧いただけます。

ふくしま復興ステーション　～復興情報ポータルサイト～

「ふくしま復興ステーション」は、ふくしま復興の現状と取組を“見つけやすく”“分かりやすい”形で世界に発信する福島県公式復興情報ポータルサイトです。

【福島県】 http://www.pref.fukushima.lg.jp/
▶福島県ホームページよりバナーをクリック!

【ふくしま地域活動団体サポートセンター】 http://f-saposen.jp/
▶トップページの「ふるさと・きずな維持・再生支援事業」バナーをクリックすると項目が表示されます。
各年度の採択団体の事業内容、活動のようすなどをご覧いただけます。

はじめに

東日本大震災から7年が経過しましたが、福島県では現在も約5万人の方々が避難生活を続けており、生活再建における不安の払拭、地域コミュニティの維持・再生、さらには原子力災害による根強い風評、時間の経過に伴う風化など、様々な課題が山積しております。

このため県では、内閣府の「NPO等の「絆力（きずなりょく）」を活かした復興・被災者支援事業交付金」を活用して、東日本大震災及びそれに引き続く原子力災害からの復興等に向けNPO法人等が行う復興支援や風評被害対策等の取組を支援するため「ふるさと・きずな維持・再生支援事業」を実施しております。

この事業により、被災者・避難者の交流サポートや心と体のケア、帰還支援、風評被害の払拭、復興まちづくりなど、NPO法人等が被災者同士、被災者と支援者等を結びつける「絆力」を活かした、きめ細かな支援活動を支援してまいりました。

本冊子は平成29年度「ふるさと・きずな維持・再生支援事業」により、復興支援・風評被害対策等に取り組まれた30団体の活動実績及び成果についてまとめたものです。

今後、これらの活動が、本県を復興へと導く大きな力となり、NPO法人等をはじめ、行政や企業、地域住民等あらゆる関係者が一体となった取組が広がり、本県のきずなの維持・再生、そして、復興がさらに加速化されることを期待しています。

結びに、より多くの皆様にご覧いただき、関係者の皆様に、これからの地域活動、復興支援・被災者支援活動の参考としていただければ幸いです。

本事業の実施にあたり、御協力をいただきました関係者の皆様に心より感謝を申し上げますとともに、皆様のさらなる御活躍を祈念いたします。

福島県企画調整部
文化スポーツ局　文化振興課

目　次

ページ番号	実施団体名 事業名
P.6	特定非営利活動法人　福島やさい畑～復興プロジェクト 福島県産農産物を県外に売り込み、顧客を獲得する事業
P.8	学校法人山口学園　ECC国際外語専門学校 福島県復興支援チャリティカフェ「カフェ・ラポール」
P.10	NPO法人　かわまたスポーツクラブ スポーツの力を信じて！健康づくりとコミュニティー交流の支援事業
P.12	特定非営利活動法人　南相馬サイエンスラボ 被災地の風評被害対策を目的とした南相馬市と川崎市の親子を対象にした乗馬・自然・科学分野の体験交流活動
P.14	特定非営利活動法人　元気になろう福島 風評被害払拭のための川内村産品プロモーション事業
P.16	いいたてまでいの会 いいたてミュージアムーまでいの未来へ記憶と物語プロジェクトー2017
P.18	特定非営利活動法人　ふくしま飛行協会 「ジュエリーふくしま」～福島の魅力を世界へ発信～
P.20	一般社団法人　ふくしま連携復興センター NPOのきずな（連携）による”ふくしま地域ビジョン”作成プロジェクト～福島初のコミュニティ基金創設を目指して～
P.22	特定非営利活動法人　未来ノチカラ 未来を絵学　こども・しごとプロジェクト　カリキュラム作成事業
P.24	特定非営利活動法人　SORAアニマルシェルター SORAのきずな2017
P.26	特定非営利活動法人　がんばろう福島、農業者等の会 顔の見える関係で風評払しょく！「福島アグリ通信」収穫祭
P.28	特定非営利活動法人　フー太郎の森基金 ボランティアで磨く地域社会を支える人材育成
P.30	特定非営利活動法人　表郷ボランティアネットワーク ”食と芸能・音楽”で被災地と近隣地域のきずなを結ぶ復興事業
P.32	特定非営利活動法人　ふくしま再生の会 飯舘村佐須地区のコミュニティ再生と文化の継承
P.34	特定非営利活動法人　中之作プロジェクト 中之作地域　町並み保存活動

P.36	**特定非営利活動法人　Social Net Project MOVE** 地域間交流事業「ふくしまみなと未来塾」
P.38	**特定非営利活動法人　ふたば創造未来塾** ふたばの今を知ろう！考えよう30年後のふるさと
P.40	**特定非営利活動法人　相馬はらがま朝市クラブ** 事業者データベース＆マッピング事業
P.42	**特定非営利活動法人　市民公益活動パートナーズ** 福島の地域活動団体をつなぐプロジェクト事業ーふくしまの今を知る・応援する・発信するー
P.44	**特定非営利活動法人　白河花里倶楽部** 人と人、人と動物との絆づくり。被災者及び高齢者が安心して動物（犬猫）と共生できる社会づくり事業
P.46	**NPO法人　ふくしま30年プロジェクト** 福島県外での情報発信活動により、風評被害を払拭し、首都圏と福島を結ぶ事業
P.48	**特定非営利活動法人　ツークンフトロカール** げんキッズ　きずなプロジェクト
P.50	**特定非営利活動法人　Wunder ground** 浜と暮らしの物語～つなぐ・つなげる・つたえる　潮目のまちのプロジェクト～
P.52	**特定非営利活動法人　福島県有機農業ネットワーク** スタディツアーや農業体験による交流人口の創出・風評払拭促進事業
P.54	**久之浜・大久地域づくり協議会** 久之浜漁港復興・漁村文化継承まつり事業
P.56	**NPO法人　団塊のノーブレス・オブリージュ** 語り継ごう福島　請戸小学校の残したもの
P.58	**特定非営利活動法人　りょうぜん里山がっこう** 地域とつながり、あそびから学びへ、子どもの体と心の向上を目指すプロジェクト～自主性をはぐくむ～
P.60	**特定非営利活動法人　シャローム** 「ひまわりプロジェクト」地域間交流事業
P.62	**特定非営利活動法人　プロジェクトFUKUSHIMA** プロジェクトFUKUSHIMA!2017
P.64	**一般社団法人　Bridge for Fukushima** SROIを用いた、NPO等の事業評価プラットフォーム構築事業
P.66	**アンケート調査結果**
P.76	**成果報告交流会**

活動団体紹介

福島県産農産物を県外に売り込み、顧客を獲得する事業

特定非営利活動法人 福島やさい畑～復興プロジェクト

団体概要
活動拠点／〒964-0905　福島県二本松市若宮1-370 TEL・FAX 0243-24-7444 主たる事務所／〒964-0905　福島県二本松市松岡265番地17 サンデュエル二本松中央806号 E-mail yasaibatake2012@gmail.com URL http://fukushimayasaibatake.web.fc2.com/

活動地域	首都圏、全国
活動分野	・農林漁村中山間

課題・背景

除染対策と放射能測定を徹底して、安全確認できた野菜にもかかわらずお客様の不買、卸業者からの安い取引などに今なお農家は苦しんでいる。県外でも福島産農産物の理解が進み、首都圏のデパートなども福島物産展を開催してくれるようになったものの、農家がそれに参加するにはガソリン代・高速代・駐車場代・販売場所代等がかかり、その金額は野菜の売上額を超えて赤字となる。また、家族経営の農家では、生産と販売の両方を手掛けるには人材が足りない。そうした状況を鑑み、当法人が首都圏での野菜販売を代行する形で活動している。販売場所はカトリック教会、お寺の敷地内をお借りしているので、駐車場代や場所代等が一切無料だからである。

目的

福島産は野菜の検査の徹底により安全確認していることを正しく知ってもらうため、また、風評被害の払拭のためには、福島県人が直接、対面で説明をしながら販売することが信頼回復への近道であると信じて、この活動をしている。ハイエース2台に野菜・果物・加工品を満載して、毎週日曜日に首都圏に出向いて販売を続けている。

取組内容・実績

1. 県内各地の約20軒の農家を回って金曜日に加工品を、土曜日には野菜・果物を集荷する。遠方（会津やいわき市）からは宅急便で倉庫に送ってもらう。直接販売箇所は東京、神奈川、千葉、埼玉で44か所になった。

　農家さんにお客様からの「おいしい!福島の野菜は味が濃い。うちの子は福島の野菜しか食べないんです。」といった声をお届けすることによって、励みになっている。農家と顧客の橋渡しの価値は大きい。

2. 毎週日曜日、ハイエース2台に集荷した野菜・果物・加工品を満載にして、首都圏のカトリック教会4か所で同時販売している。

当法人からはスタッフ1人で行くので、現地の方に販売のお手伝いをお願いしている。お客様が一度にどっと押し寄せるので、一人では対応しきれないため。

お客様からは「新鮮でおいしい、新鮮だから日持ちする」という声が多い。

3. 遠方（首都圏以外）については、宅急便でお送りして委託販売していただいている。

また、個人の方からの注文も増えている。定期的にお米を購入してくださる方、旬の野菜をセットにした「お任せ野菜セット」を定期購入してくださる方も増えている。

さらには、食べておいしかったので、贈答として友人に贈りたいというご希望もある。果物などはほとんどそうである。

事業の成果

首都圏での販売が始まった当初は、「応援」のために買ってくださるという方々がほとんどであった。しかし、地道に販売を続けて6年、今では「おいしいから」買うというお客様が大半を占めるようになってきた。遅くいくと無くなってしまうからと、まだ夜が明けないうちに買いに来られるお客様もおられる。お客様の福島野菜への理解とファンが増えてきたと見る事ができる。果物の季節には、友人・知人への贈答として利用するお客様も増えた。「今度、いつ販売に来てくれるの？」と次の販売を楽しみにしてくれるお客様も多くなった。

お客様の当法人の福島野菜への評価は、「新鮮で味が濃い。日持ちがする。おいしい。」などである。当法人の目標は着実に実を結んでいると自負している。

今後の展開

当法人の販売を楽しみに待っているお客様も増え、定着してきたので、やめるにやめられない嬉しい状況である。来年度ももちろん継続していく。

昨年10月のヤマト運輸の値上げは大きな問題だったが、お陰様でお客様は理解を示し、宅急便で購入されるお客様も減少することはほとんどなかったのは感謝である。

今後はお客様を逃がさないためにも可能なサービスを充実させていきたいと考えている。

福島県復興支援チャリティカフェ「カフェ・ラポール」

学校法人山口学園　ECC国際外語専門学校

団体概要	活動地域	大阪
〒530-0015 大阪府大阪市北区中崎西2-1-6 TEL 06-6311-1446・FAX 06-6311-1440 E-mail yaraya@ecc.ac.jp URL http://kokusai.ecc.ac.jp/	活動分野	・社会教育

課題・背景

●取り組みをはじめた背景

東日本大震災発生時に、学生が「僕たちに何かできる事はありませんか？」という言葉から、在学中に得た学びを活かして福島県の力になれることがないか考えたことがきっかけ。

●課題

福島県を実際に訪れ、風評や風化が今後の課題と知り、風評ではなく、自分達の五感で確かめた「ふくしまの魅力」と「ふくしまの今」を発信すること。

目的

●福島県の現状把握と正確な情報発信により、風評・風化防止に取り組む。
●若者の情報発信力で、同世代に正しい理解と「安心・安全」をPRする。
●在学中に得た専門力とホスピタリティ精神を活かす。

福島県沿岸部を視察
「かしまの一本松」にて

取組内容・実績

●福島県復興支援チャリティカフェ「カフェ・ラポール」の開催

ホテルコース2年生が、在学中に得た専門力とホスピタリティ精神を活かし、2日間限定のチャリティカフェを運営。カフェ内には、復興支援展示ブースを設け、福島県視察を通し、学生が五感で感じた福島県の現状を情報発信。本年度は、阪急阪神ホテルズ・ウエシマコーヒーフーズ・大阪市北区役所・タレントのなすび氏、他多くの企業・団体様のご支援をいただき、5日間で1,274名様に来店いただき、売上合計1,032,950円に上りました。また、当日の募金や物販の売上を含めた合計1,184,305円は、平成30年2月13日に東北地方太平洋沖地震に対する寄附金として、福島県に寄附いたしました。

福島県の空に「チャリティカフェ」の成功を誓いました。

カフェは、終日満席。お客様もスタッフも笑顔がたえない素敵な空間でした。

●福島県の「安心・安全」のPR

カフェでは、ふくしまの水を使った「ふくしまコーヒー」や、ふくしまのりんごと「会津の山塩」を使用した、オリジナルノンアルコールカクテルを、学生が自ら開発。毎日口にする水や食材を利用することで、味の美味しさと安全性をPRできました。

ふくしまコーヒー「ふくしまの水」
提供：福島県福島市産農産物販売促進協議会

ノンアルコールカクテル
「シエルモヒート」
会津山塩提供：会津山塩企業組合

●福島県産りんごのベイクドフロマージュ＆キャラメルショコラ

協賛企業の阪急阪神ホテルズの若手パティシエへ、オリジナルのケーキ開発を依頼。ホテル名を提示することで、食品の安全性を大々的にアピールできました。1日各100個、期間合計1,000食完売。

りんごのベイクドフロマージュ

りんごのキャラメルショコラ

●福島県銘産品販売コーナーを設置

カフェ待合室に、りんごや米など、全9品を販売。試食コーナーもあり、全品完売しました。

＊取扱商品＊

・舞茸ご飯の素	・桃の恵み
・喜多方ラーメン	・米
・りんご	・うまくて生姜ねぇ
・酪王カフェオレクランチ	・セミドライフルーツ　2種

●地域連携イベントに参加

「梅田スノーマンフェスティバル2017」

大阪梅田の中心地「阪急梅田サン広場」にて福島県復興支援チャリティマルシェ「ふくしまマルシェ」を開催。JR大阪駅前サイネージで活動をPRできました。

大阪駅阪急百貨店前大サイネージにて活動PR

●若者による情報発信

1.SNSを利用した、情報を発信。
　ツィッター・フェイスブックにより情報発信。
　Twitter：@RapportCafe
　Facebook：ECC Hotel International Café Rapport
　Instagram：café_rapport

2.地域イベントや福島県大阪事務所の手伝いで情報発信。
　2017年9月23日　　大阪市都島区民まつり
　関西福島県人会の名産品販売協力・福島酒まつり会場では、200人ほどのお客様の前で、福島県訪問時の感想をスピーチさせていただきました。

＊その他の参加イベント＊

・2017年10月　1日	「ニコニコフェスタ」参加
・2017年11月　7日	チャレンジふくしま　フォーラムin 関西
・2017年11月16日・17日	「ふくしまの酒2017大阪秋の陣」
・2017年11月18日	大阪市「北区ふれあいフェスタ」
・2017年11月25日・26日	梅田スノーマンフェスティバル2017 11:00～16:00　阪急サン広場にて、福島県支援チャリティマルシェ開催
・2018年1月21日	コミュニティラジオ・さくらFM「まちたびラヂオ」にて、活動報告 学生4名が、パーソナリティと対談

●ラジオ関西生放送「時間ですよ！林編集長」

2017年12月5日　ラジオ福島と同時二元中継にて、
タレントのなすび氏が、活動をPRしてくださいました。

事業の成果

活動も7回目(7年目)となり、多くのイベントからお声掛けいただき、参加要請が増えました。福島へ実際に足を運び、五感で感じたふくしまの魅力を発信する姿に、多くの人々が関心をもってくださっていて、参加するイベントでは、必ずお客様からお声掛けをいただいております。ふるさとのように福島に愛着を感じ、胸を張って商品を販売する姿に、多くの方に安心と信頼を感じていただけ、風評払拭に繋がっていると感じております。物産展で扱った商品は、主婦層(子育て世代)をターゲットとしたものが多く、学生(子ども世代)の説明に、商品を手に取り、耳を傾けるお客様の姿がとても印象的でした。

また、学生が参加した活動を通して、兵庫県西宮市のコミュニティラジオ・さくらFMより出演依頼があり、パーソナリティと学生4名が活動について対談をする機会をいただきました。番組には、関西のみならず、福島県のリスナーさんからのお便りもいただき、学生のやりがいにつながりました。

活動期間中一番の励みになったことは、福島県知事・内堀雅雄様が、激励に来校くださったことです。何よりの力となり、学生は、継続が力になる事、また、繋がりの大切さ、そして、活動に対する誇りを実感する、大変貴重な機会となりました。内堀知事のご来校において準備に関わってくださいました県職員の皆様へ、心より御礼申し上げます。ありがとうございました。

第7回開催にご来店いただきましたお客様の総数は、1,274名様、当日の募金や物販の売上を含めた合計1,184,305円に上り、平成30年2月13日に東北地方太平洋沖地震に対する寄附金として、福島県に寄附いたしました。

今後の展開

本事業を開始以来、運営の形や規模を変えながら、今年で7年目を終えました。回を重ねる毎に、賛同いただける団体・個人が増えていることが、嬉しい限りです。また、入学生の中には、この企画に携わりたいが為に、本校に入学する学生もおり、関西での注目度も増して参りました。よって、今、活動を終えるという選択肢は、私達にはございません。一回一回の寄附金額は微々たる物ですが、末永く支援を続けたいと思っております。

NPO法人 かわまたスポーツクラブ

団体概要	活動地域	川俣町
〒960-1405 福島県伊達郡川俣町大字東福沢字万所内山2-3 TEL 080-6056-1777・FAX 024-565-3932 E-mail kawamata_sc@yahoo.co.jp	活動分野	・文化芸術スポーツ ・子どもの健全育成

課題・背景

震災から6年が経過し、平成29年3月末には川俣町の一部に出されていた避難指示区域が解除された。これから本格的な復興へと動き出し、道路や施設を作ることよりも、離れ離れになってしまったコミュニティーの再興には誰もが不安を抱えている。

目的

かわまたスポーツクラブの持つネットワークを生かし、健康づくりだけでなく、スポーツを通じたコミュニティー促進を行い、町の活性化に貢献する。

取組内容・実績

①スポーツ吹矢クラブの活動支援

実施：6月～3月末
開催：毎週月曜　13:30～15:00
講師：県スポーツ吹矢協会川俣支部
内容：講師より、吹矢準備体操や基本動作を教わり、初心者でも楽しんで取り組むことができるように行う。
実績：31回実施／315人参加（平均10.2人）

②グラウンドゴルフクラブの活動支援

実施：6月～3月末
開催：毎週水曜　9:00～11:00
講師：川俣町グラウンドゴルフ協会
内容：初心者でも楽しくゲームができるまで、講師より指導を受けて行う。
実績：36回実施／410人参加（平均11.4人）

③ノルディックウォーキング健康歩きクラブの活動支援

実施：6月～3月末
開催：月2回(土曜)　9:00～11:00
講師：日本ノルディックフィットネス協会
内容：講師から正しいフォーム・ポールの使い方を教わり、
　　　6～10km程度を歩く。
実績：18回実施／229人参加(平均12.7人)
　　　・町外(桑折町西根堰)ウォーキング(11/11)　14人

④エクササイズ教室の活動支援

実施：6月～3月末
開催：月2回(金曜)　19:30～21:00
講師：キャンダンススタジオ　佐藤香
内容：筋力トレーニングや音楽に合わせたフィットネスを行うことで代謝を高める。
実績：18回実施／126人参加
　　　(平均7人)

⑤おしゃべりハイキングクラブの活動支援

実施：年4回
講師：福島県森の案内人　菅野寛一郎
内容と実績：
1.仁田沼ハイキング(6/24)25名
2.大内宿ハイキング(9/30)22名
3.猪苗代湖畔ハイキング(11/3)21名
4.羽鳥湖ハイキング(12/2)21名

事業の成果

・避難者や帰還者の参加を促し、孤立化防止に貢献できた。
・活動で知り合った者同士が、新たに繋がって活動を行うようになった。
・教室で教わった体操や競技を自宅でも行うようになり、健康促進に繋がった。
・町自治体との連携が強化された。

今後の展開

いずれの事業においても好評を得ることができましたので、継続を検討します。

町自治体や他クラブとの連携も強化できたので、活動範囲を広め、多くの参加者を集めて実施していきたいと考えます。

被災地の風評被害対策を目的とした南相馬市と川崎市の親子を対象にした乗馬・自然・科学分野の体験交流活動

特定非営利活動法人 南相馬サイエンスラボ

団体概要	活動地域	南相馬市
〒975-0002 福島県南相馬市原町区東町2-50 TEL・FAX 050-1564-9124 E-mail sciencelabo2011@gmail.com URL http://www.sciencelabo2011.com	活動分野	・まちづくり ・観光振興 ・環境保全 ・子どもの健全育成 ・科学技術

課題・背景

全国の地方都市には社会・経済・産業・医療・福祉・食料・エネルギー・教育など様々な問題が存在し、南相馬市及びその周辺地域は、それに加えて震災によって甚大な被害を被った。平成28年7月には原発から20キロ圏内に出されていた避難指示が解除され、同年12月には常磐線の仙台方面が開通するなど、復興が進みつつある。しかし、今もまだ農林水産業に関する風評被害は続いており、首都圏における被災地に関する報道も減ってきたことなど、そうした問題を解決するためには多くの課題が存在する。

そうした中、当法人は平成28年8月に自然科学・農業食育・環境保護・歴史文化等の教育支援活動を目的としたNPO法人としてそれまでの任意団体の活動を継承し、活動を続けている。そうした中、川崎市を中心とした市民団体（世研話）とつながり、首都圏から被災地の現状を知りたい人々との交流が始まった。

目的

震災後、南相馬市では全国の地方都市が抱える共通の問題（社会・経済・産業・医療・食料・エネルギー・教育など）に加えて、原子力災害を受けたことで、震災から6年を経た今も、被災地への深刻な風評被害が長く続いている。私たちは相馬地方と川崎市の親子を対象にした乗馬、自然体験、科学実験などの体験交流活動を行い、被災地の現状を多くの人に知ってもらい、被災地が抱える風評被害解消を図りたい。

取組内容・実績

都会と南相馬の親子が自然体験をもとに交流する親子ポニーふれあい体験教室（6月18日）を実施した。福島県職員による東ヶ丘公園の説明を受け、ゼロ村牧場パカラッチョによるポニーふれあい乗馬を行った。地元の食材を使った昼食をとり、南相馬市博物館の学芸員から相馬野馬追に関する解説をいただいた。都会からの参加者は、浪江・双葉の津波被災地を訪問し、帰路に着いた。（参加者49名）

都会と南相馬の親子が自然体験をもとに交流する親子ポニーふれあい体験教室・羽根田カンポス彗星発見の地を見てみよう（8月12～13日）を実施した。ゼロ村牧場パカラッチョによるポニーふれあい乗馬を行い、地元の公民館に宿泊した。翌日は南相馬市で、かつて新彗星を発見した羽根田利夫さんの偉業を振り返るイベントに参加し、偉人の功績を学んだ。（参加者35名）

被災地の状況や当法人の教育による復興活動を伝えるため、都会の親子を対象にした親子科学実験教室「はちみつって何だろう？」（12月23日・1月27日・2月18日）を巣鴨養蜂園、世研話など協力を得て3回実施した。被災地の復興活動を伝えた後、地球誕生から生命の大進化、ハチと人間生活との関わり、生態系や環境保護などを、はちみつができるまでを題材に学んだ。（参加者110人）

事業の成果

南相馬市と首都圏の人々の交流活動を複数回実施することで、多くの交流が生まれた。南相馬市への関心が大いに高まり、また南相馬市を訪問したいという人々が増加した。本事業は風評被害解消に向けた確実な成果を上げていると確信している。

今後の展開

世研話、巣鴨養蜂園、川崎市教育委員会、やる気スイッチグループなど、市外の様々な団体との繋がりを今後も発展させ、次年度は南相馬市の歴史や文化などをテーマにした都会との交流事業を行いたい。また、新たな科学実験の内容を検討することで、交流を発展させ、さらに福島県の風評被害の払拭に貢献したいと考えている。

風評被害払拭の為の川内村産品プロモーション事業

特定非営利活動法人 元気になろう福島

団体概要
活動拠点／〒960-1102 福島県福島市荒町4-7 県庁南再エネビル2F TEL 024-563-7166・FAX 024-545-8908 主たる事務所／〒960-1102 福島県福島市永井川字古寺23番地の3 E-mail info@genkifukushima.jp URL http://genkifukushima.jp/

活動地域	川内村
活動分野	・まちづくり ・農林漁村中山間

課題・背景

①原発事故による生産物への風評被害の継続､それに伴う農業者の意欲低下や農業の閉塞感
②農業者の高齢化､後継者不足など風評被害以外で農業が抱える課題

目的

①日本酒を新たな村の特産品として確立し､川内村の産品とあわせてPRすることによる風評被害の払拭
②酒造りを通した新しい農業生産および六次化のモデル作り
③地域資源を活用したまちづくりのモデル作り

取組内容・実績

プロモーション素材の作成

・福島大学と連携し､酒名決定の村民投票､日本酒のラベルデザイン､栞の製作
・日本酒作りをまとめたプロモーション映像の制作

川内村産品PRイベント＆お酒完成披露会の開催

・川内村と東京都新宿区にて実施
・日本酒完成披露のセレモニー、日本酒と川内産品を味わいながらの交流会
・川内会場60名、東京会場100名の参加

消費者の現地視察ツアー

・手刈りによる酒米の稲刈り体験やワイン用の葡萄畑の視察、川内村の産品を味わう昼食交流会などのプログラムで実施
・村外参加者8名、村内参加者5名

事業の成果

川内村で初となる酒米による日本酒造りを無事終えることができ、それを中心としたプロモーション活動にも取り組むことができた。

多くの方に川内村の農業が前に進んでいることをアピールできたように感じる。

また、消費者に対しても完成した日本酒と川内村の産品をセットにしてPRすることで、「おいしいお酒と食べ物が楽しめる村」としてのイメージを持ってもらうことができた。

今後の展開

初めての日本酒作りということで生産量も多くはなかったが、今年度の取り組みを継続・発展させ、村の特産品としてのブランディング、農産物などの産品と合わせた複合的なプロモーションを展開していきたい。

また、村内で実施されているワイン作りを始めとした様々な取り組みと連携できる体制を整えていき、一体となって川内村の魅力向上に取り組んでいきたい。

いいたてミュージアム
ーまでいの未来へ記憶と物語プロジェクトー2017

いいたてまでいの会

団体概要	活動地域	福島市・飯舘村他
〒960-8042 福島県福島市荒町4-7　県庁南再エネビル2F TEL 070-5622-4982・FAX 024-572-6800 E-mail iitatemadei@gmail.com URL http:// iitate-madei.jp/	活動分野	・文化芸術スポーツ ・その他

課題・背景

2017年3月31日の帰村により、新たな分断が進むコミュニティの再生と軋轢の緩和を図ることが課題とされる。また、福島県の正確な現状を、県外に広く発信し理解の輪を拡げることも重要であると考える。

目的

本格的な復興に向かう飯舘村の姿を、震災後の避難から現在までの復興の取り組みを語る資料を通して県内外に発信することで、飯舘村に代表される福島のまでいな暮らしをアピールし、福島県のイメージの回復を図ること。

取組内容・実績

「いいたてミュージアム」とは、原発事故により全村避難となった飯舘村のことを、村民の皆さんからいただいた「モノ」と「言葉」で県内外に広く発信し、未来にも伝えていこうというプロジェクトである。

〈いいたてミュージアム展覧会〉

◇会　　期：6月16日～22日
◇会　　場：福島市荒町　再エネビル3階ホール
◇観覧時間：10:00～17:00

2013年から飯舘村民に取材して収集した「モノ」約100点を展示し、飯舘村の生活や文化を後世に伝えるための展覧会を開催した。会場では取材の様子をまとめた映像も流して村民の思いを伝えた。(来場者：のべ約70人)

〈いいたてミュージアム巡回展〉

[白河巡回展]

◇会　　期：8月12日～9月3日
◇会　　場：白河市本町　コミュニティ・カフェEMANON
◇観覧時間：12:00～22:00

約40点の「モノ」を展示し、県南地区で初めての巡回展を開催。古民家を改装したカフェの店内(1、2階)での巡回展も初の試みとなった。毎日のように勉強しに来る生徒等、若い世代が常に集まる会場での展示は大変有意義なものとなった。(来場者：のべ約170人)

[高知巡回展]

◇会　　期：9月23日～10月29日
◇会　　場：高知市南金田　アートゾーン藁工倉庫
◇観覧時間：10:00～18:00

白河展同様約40点を展示した四国初の巡回展。までいなモノづくり、までいな村づくりをして来た飯舘村の姿を県外に発信する機会となった。大地震発生帯である南海トラフに近い高知県民にとって震災に対する関心は深く、「モノ」を通して見えてくる震災や原発問題について改めて考えるきっかけとなった、との声があった。(来場者：のべ約260人)

[京都巡回展]
◇会　　期：2月9日～2月18日
◇会　　場：京都市中京区　gallery Artislong
◇観覧時間：12:00～19:00
◇日　　時：8月18日

東日本大震災時から東北への支援を続け、チャリティー展等の開催を重ねているギャラリーでの巡回展を開催。期間は短かったが、開催前の問い合わせも多く、関心の深さを実感した。福島と京都を繋ぐ貴重な機会となった。(来場者:のべ約100人)

〈いいたてミュージアム勉強会〉

[白河勉強会]「地域コミュニティの在り方」
◇日　　時：8月18日
◇会　　場：白河市本町　コミュニティ・カフェEMANON
◇時　　間：18:00～19:30

当会の共同代表で飯舘村森林組合代表の荒利喜さん、コミュニティ・カフェEMANON代表の青砥和希さんを講師に迎え、荒さんからは全村避難から帰村までのコミュニティ維持活動等、青砥さんからは過疎化する地域のコミュニティを若者を中心にしていかに活性させていくか等を語っていただいた。(参加者：23人)

[高知勉強会]「高知×いいたて×静岡　いいたてに学ぶ」
◇日　　時：9月24日
◇会　　場：高知市南金田　アートゾーン藁工倉庫
◇時　　間：13:30～15:30

飯舘村民で「ふくしま再生の会」副理事長の菅野宗夫さんと静岡大学教授の平野雅彦さんを講師に迎え、菅野さんには農業という立場で村の復興に取り組んできたこれまでの活動や村の現状、そしてこれからの活動等、平野さんには、東海沖地震や浜岡原発事故に対する防災意識の形成についてのお話をお聞きした。(参加者：39人)

[京都勉強会1]「支援のかたち」
◇日　　時：2月9日
◇会　　場：京都市中京区　gallery Artislong
◇時　　間：18:00～19:30

[京都勉強会2]「農と食と暮らし」
◇日　　時：2月10日
◇会　　場：京都市中京区　gallery Artislong
◇時　　間：13:00～14:00

[京都勉強会3]「いいたてから日本の未来へ」
◇日　　時：2月10日
◇会　　場：京都市中京区　gallery Artislong
◇時　　間：14:00～15:30
　　　　　(映画「おだやかな革命」上映)
　　　　　16:00～17:00(トーク)

2日間3回の勉強会を実施。1回目は震災直後から支援を続け、2017年の帰村と同時に県外から飯舘村に住居を移した田尾陽一さんと当会共同代表の2名を講師に、震災後から現在まで、そして今後の「支援のかたち」について話し合った。2回目は、飯舘村から三重県に避難し、現在はさらに京都府に移住した村上日苗さんの「農と食」に関するお話を、3回目は、エネルギーのあり方を取材した映画「おだやかな革命」の上映後、京都造形芸術大学教授の山下里加さんと、同映画に出演した当会幹事長が「福島から発信する未来」を話し合った。(参加者:3回計約100人)

事業の成果

白河展では、高校生との事前勉強会を実施し、会場設営にも協力してもらうなど、事業への関心を若年層に広げることができた。また、高知、京都展では、地元新聞社からの熱心な取材や、開催後の地元ラジオ局への生出演等により、関西の方々からの資料の請求などがあり、飯舘村や福島県に対する県外の方々の理解と関心が得られ、風評被害の払拭に役立った。

今後の展開

「箱」を持たない自由度の高いミュージアムの特性を活かし、連携する団体等の要請に応じて、県外のイベントへの貸し出しも検討している。

特定非営利活動法人 ふくしま飛行協会

団体概要	活動地域	福島市
〒960-8251 福島県福島市北沢又日行壇7-48 TEL 024-563-6589・FAX 024-563-6590 E-mail info@ffa.or.jp URL www.ffa.or.jp/fsp/	活動分野	・まちづくり　・観光振興 ・文化芸術スポーツ ・災害救援　・地域安全 ・子どもの健全育成 ・その他（農業振興）

課題・背景

当協会が指定管理者として「ふくしまスカイパーク」を活用、原子力災害に伴う風評被害払拭等に力を入れ、県外来場者を増やすための様々な事業を実施し一定の効果を得てきた。しかし、底堅い風評被害は風化現象をはらみつつ日常の延長上の活動では払拭には至らず、地域再生の障害となっている。

目的

実際に福島県に足を運んでもらえる事業（スカイパークでしか開催できないイベントや施設見学ツアーなど）や、ファンの多い航空関連イベントとスーパーGTカーの展示なななどと結びつけ、農業復興のハイライトつくり等、世界発信を前提に事業を行い、現実の福島を見て安全・安心を実感してもらい風評被害払拭を図ることを目的とする。

取組内容・実績

スーパースカイアグリ2017（りんご祭り）」イベント

- オープニング・セレモニーには、ジャン＝フランソ・パロ駐日大使、内堀福島県知事、小林（前）福島市長のご臨席ご挨拶があった。
- 室屋義秀選手によるエアショー、スーパーGTカーのデモ走行や、地元・学法福島高校のエコラン研究会による電気自動車のデモ走行などが実施された。また、自衛隊や消防の車両や装備品展示、県警航空隊ヘリ安全啓発展示飛行・福島県消防防災ヘリによる展示飛行が実施された。
- 展示ブースでは福島県県北振興局やまちの駅ネットワークふくしまなどによる観光PRブース、福島南ロータリーのバザーブース他、地元企業の飲食ブースなどが出店、イベントの趣旨を踏まえ実施した。
  - ・9月23日（土）約2,500名
  - ・9月24日（日）約3,500名　**来場者数合計　約6,000名　　※県外来場者64%**

「果物の宝石箱」

- 9月23日（土）・24日（日）の特別観覧席入場者（490名）及び県外からの招待者（71名）に「果物の宝石箱」（1,000個製作）を進呈、残余439個については、県外からの施設見学ツアー・県外からの施設利用団体・日本体育大学学生食堂で福島農産品活用PR用・サード（トヨタ系先進事例実施企業）へのクリスマス・プレゼントなど、県農産品の全国PR展開を実施した。（日体大で福島農産品活用決定【大学経営者から福島市長に直接報告：12/28】）

「ふくしま最高スイーツ」

- 桜の聖母短期大学と福島市農業振興室の共同企画により、福島県産のモモなどを使ったお菓子などを販売した。産官学の共同事業が、スーパースカイアグリ2017という舞台でPRすることで販売促進と六次化農産品対面販促効を目的として実施した。

「音楽で結ぶ国際交流による復興支援」

- 9月23日（土）パロ駐日大使が福島とスイス友好の印として、ふくしまスカイパークに新たに設置された記念碑（ウイリアムテル・レリーフ）を除幕した。この式典には内堀福島県知事、小林（前）福島市長もご臨席、福島大学吹奏楽団がウイリアムテル序曲と威風堂々（エルガー）を式典曲として演奏した。

「ライブ動画配信」

●Facebook及びYouTubeで動画配信を行った。
・9月23日（土）9,496視聴数
・9月24日（日）8,646視聴数　**視聴者数合計18,142視聴数**

「アーカイブ配信」

●ライブ配信をした動画を、アーカイブとしてFacebookで公開、11月1日（水）現在で13,338視聴数を得た。

●スパースカイアグリ2017の公式動画をYouTubeで配信
【公開アドレス】https://www.youtube.com/watch?v=6c8O_JU3Fro
【検索キー】「ふくしま　スイス　絆」

●スイス国との国際情報交流（アーカイブ交流）
スイス国で通訳をされているグロー布施圭子氏（IOC本部【ローザンヌ】にオリンピック招致のため訪問した猪瀬元都知事の通訳）関連の通訳組織に、公式動画を提供した。なお、同氏はふくしま飛行協会が主催したスイス訪問団（2014）の通訳としてご活躍いただいた。

「ジュエリーふくしま・2020復興五輪関連交流福島市上空視察飛行」

9月23日（土）2020東京オリンピック・パラリンピック競技大会福島市協議会の委員及び関係者9名が参加（福島市オリパラ推進室経由で推薦をいただいた）、あづま運動公園周辺の上空視察飛行を実施し2020オリパラの理解を深めた。（2018年4月7日、第二回開催【自主事業】）を予定。

「震災から現在のふくしまスカイパークそして未来へ！施設見学ツアー」

●宮城県及び栃木県の新聞にツアー募集案内の広告を掲載、またスカイアグリ2017イベントのプログラムにも掲載した。
・6月24日（土）　関東の田辺工務店様　　37名
・7月　7日（金）　北関東新聞社・社長会様 18名
・9月28日（木）　東北新聞社・社長会様　 25名　**参加者合計　80名**

事業の成果

①「県外者との交流」
福島県県外者に事業を告知広告することで、イベント参加者約6,000人の内、約64%県外者の参加を得た。このことで「福島の希望ある明日」の創造を前進させた。

②「日本・スイス交流」
国交樹立150年（2014）を契機に始まった、ふくしま飛行協会とスイス国の交流がさらに展開され、スイス大使館をとおし確実（今般イベントにパロ大使のご臨席を含め）なものになってきた。また、2020オリパラのスイス国ホストタウン（福島市）としての事業推進に寄与した。

③「果物の宝石箱」
即効的効果（実績）を実現させ、かつ農産品風評災害を解決する手段の解決策の一つの方法論を導いた。（日体大で福島農産品活用決定【大学経営者から福島市長に直接報告：12/28】）

④「音楽で結ぶ国際交流」
福島大学吹奏楽団による式典曲（ウイリアムテル序曲）の演奏でタクトを取った畠山渉氏（スイス音楽院留学マスタークラスを受講、優秀受講生になったことをパロ・スイス大使に会場内で直接報告）と協力し、スイス大使との親交を推進した。

⑤「ジュエリーふくしま・2020復興五輪関連交流福島市上空視察飛行」
視察搭乗（9名）した推進委員の中にはマスコミ関係者もおり、早速このことがTVで取り上げられた。推進委員からオリパラ推進の決意なども聞かれた。

⑥「震災から現在のふくしまスカイパークそして未来へ！施設見学ツアー」
福島民報社の全面的協力もあり北関東新聞社社長会18名、9月28日（木）東北新聞社社長会25名の参加を得た。ふくしまスカイパークが福島で紹介したい代表的施設の一つになったと理解できる。

今後の展開

ふくしまスカイパークがマスコミを含め、メジャー展開が可能になったことを受け、大型イベント開催から本質的地域づくりに応用展開する。

「パッケージングによる農産物販売振興」（仮称）
福島大学未来支援センター（小山良太教授）と連携し、風評払拭の明確な足掛かりをつくる。

「ふくしまスカイパーク空のステージ」
福島県内優良小規模企業の展示発表の機会を創出する。また、自衛隊航空機展示飛行・県警ヘリ・防災ヘリにも「空のステージ」に参加いただき、県民安全安心・災害時航空拠点としての紹介を兼ねる行事とする。

「震災から現在のふくしまスカイパークそして未来へ！施設見学ツアー」
北関東や東北の新聞社と連携し、告知広告を含め経年的ツアーに発展させる。

NPOのきずな(連携)による"ふくしま地域ビジョン"作成プロジェクト
～福島初のコミュニティ基金創設を目指して～

一般社団法人 ふくしま連携復興センター

団体概要
新住所/〒960-8062 福島県福島市清明町1-7 大河原ビル2階 H29.6.1時点住所/〒960-1248 福島県福島市金谷川1 TEL 024-573-2732・FAX 024-573-2733 E-mail info@f-renpuku.org URL https://f-renpuku.org

活動地域	福島県
活動分野	・その他

課題・背景

●課題先進地「ふくしま」

東日本大震災及び福島第一原子力発電所事故を受け、ふくしまでは震災前からの地域課題、高齢化や人口減少などが加速している。さらに原子力災害という特有の影響もあり、課題がさらに複雑化している。

●復興活動・地域づくり活動で活躍する地域活動団体

県内のNPO法人数約900法人のうち、約半数426法人が震災後に立ち上がった団体である。震災後の復旧、復興活動や地域づくりにおいて、市民が主体となった地域活動が活躍している。

●2020年の復興庁設置期限まで2年

震災後6年が過ぎた福島の復興活動・地域づくり活動では依然復興関連予算に頼るところが大きい。復興庁設置期限を目前にした今、復興関連予算に代わる資金・地域の多様な課題に応じ柔軟に活用ができる地域金融の仕組みが必要である。

目的

新たな地域金融の仕組みとして、福島初のコミュニティ基金を立ち上げるにあたり、"ふくしま地域ビジョン"を作成することによって地域の想いや意思が本当の意味で反映されたコミュニティ基金設立を実現する。

・100年先を見据えたこの地域ならではの"豊かさ"を実現していく基金を設立する
・"豊かさ"の姿を決めるのは県民自身である
・本当の意味で地域の想いや意志が基金に反映される必要がある

取組内容・実績

●"ふくしま地域ビジョン"作成のための県民ワークショップ開催(県内)

6月～10月にかけて全59市町村で座談会･ワークショップを開催。県民の直接の声を"ふくしま地域ビジョン"として整理･作成した。

・8/23(水)～ 8/25(金) 福島市、川俣町、伊達市、桑折町、国見町、本宮市、大玉村、二本松市
・8/29(火)～ 8/31(木) 矢吹町、中島村、石川町、西郷村、浅川町、白河市、棚倉町、塙町、鮫川村
・9/ 5(火)～ 9/ 7(木) 檜枝岐村、只見町、南会津町、昭和村、下郷町、天栄村
・9/12(火)～ 9/14(木) 猪苗代町、磐梯町、北塩原村、喜多方市、湯川村、会津美里町、大熊町(会津若松市)、会津若松市、柳津町、西会津町、金山町、三島町
・9/20(水)～ 9/22(金) 田村市、川内村、富岡町、楢葉町、広野町、双葉町(いわき市)、いわき市、古殿町、矢祭町
・9/27(水)～10/ 4(水) 小野町、平田村、玉川村、須賀川市、鏡石町、三春町、郡山市、会津坂下町、飯舘村、葛尾村、浪江町、新地町、相馬市、南相馬市

●“ふくしま地域ビジョン”作成のための県民ワークショップ開催（東京都内）

県内全59市町村で座談会・ワークショップにあわせて県外でも同様のワークショップを開催。都内のふくしま出身者やふくしま縁の方々の声を“ふくしま地域ビジョン”として整理・作成した。

・10/ 6（金） 東京都内

●“ふくしま地域ビジョン”への共感を得るためのシンポジウム開催や関連イベント参加

11月～3月にかけてシンポジウム開催や関連イベント等を通してNPO等を支え続ける意味を発信。“ふくしま地域ビジョン” を周知するとともにコミュニティ基金創設への理解と共感を得る為の活動を行った。

事業の成果

●「“ふくしま地域ビジョン”」5つの柱作成

1.地域活動の先進地を目指す

復興の取組みを通じて、ふくしまには多くの地域活動団体が誕生し、活動してきた。この流れをさらに成長させ、世界に誇る地域活動の先進地域と呼ばれるふくしまをつくる。

2.地域活動の第一歩を踏み出せる場所

地域のために何かを始めるには、大きな決断と勇気が必要。従来からある起業支援などのサポートに加えて、その第一歩を応援してくれるコミュニティの育成、受入体制の整備も同様に不可欠である。

3.市民が成長し合い、繋がり合う

これからを担う人材を育成すること、そして大人同士も成長し合い、成熟した市民社会の担い手として繋がり合っていくことが、ふくしまというコミュニティを進化・深化させる鍵になる。

4.小さな経済、地域ならではの生業を創出する

地域活動を通じて形成される小さな経済、顔の見えるコミュニティビジネス等が、ふくしまを元気にする。そうした生業で賑わう地域社会をつくる。

5.ふくしまを伝え続ける

私たちの生活から遠ざかってしまった伝統や地域文化を継承していくこと、地域活動の歴史を伝えていくこと、そして未来に向けた歩みを発信していくこと。百年後まで、ふくしまを伝え続ける。

今後の展開

●ふくしま百年基金の設立 （平成30年4月設立予定）

●“ふくしま地域ビジョン”に基づいた事業を展開

・テーマ型助成事業

・人材育成支援

・初めの一歩を支える社会的投資など

●地域の声・アイディアを聴き、つなぎ続ける（全ての事業の基本となる仕組み）

全県をまわりながら地域の声・アイディアを聴き、それらの声を『ふくしま百年基金』の事業に活かしていく。地域との対話を通じて、『ふくしま百年基金』自身の評価を積極的に行ない、成長させていく。

特定非営利活動法人 未来ノチカラ

団体概要	活動地域	会津
〒965-0041 福島県会津若松市駅前町8-1 TEL・FAX 0242-85-7008 E-mail masayuki@aizu-net.net URL https://www.facebook.com/mirainochikara/	活動分野	・子どもの健全育成

課題・背景

平成25年の小学生・中学生の意識に関する調査で将来どんな職業に就きたいかを聞いたところ、小学生男子の14.7%、女子の11.4%が「わからない」と答えたのに対し、中学生になると男子が24.3%、女子が17.4%と、「わからない」が増えている。

これに加え、震災を経験した子どもたちは、将来に希望を持ちづらくなっていることから、キャリア教育の充実する事により将来継続しているかもしれない復興事業に携わる人材育成にもつながる。

目的

原子力災害による風評被害にさらされている福島県において、廃炉まで30年かかるといわれている現状では、今の子どもたちの代まで復興事業が継続されると懸念される。

そこで福島の子どもたちにキャリア教育を実施していく事で、大人たちも長い復興への道のりに対する希望を持ち、子どもから大人まで一丸となって戦う福島県というイメージ作りが風評被害払拭にもつながっていく。

取組内容・実績

小学生の夢、例えば「花屋さん」をどんな花屋さんになりたいかを考えさせ、その夢はなくなっても「どんな」人になりたいかは残るように、社会の中での自分の役割を考えさせるカリキュラムを考案。楽しみながらできる職業観カードゲームツールを作成する。

①高校生・学生ボランティアとアイデア出し

作成過程においてゲームの中で起こる様々な課題や解決案などを3回にわたり、高校生・大学生と一緒に考えた。

述べ14人のボランティアが参加した。

②カードゲーム作成

専門家の意見を取り入れながら、子どもにわかりやすく職業の種類や必要能力を理解させるような、楽しみながらできる職業観カードゲームツールを作成した。

事業の成果

子ども達の自己肯定感が強まり、将来の自分やしごとに希望が持て、より具体的に将来像を描けるようになった。

「繋がる力（人や社会と関わる力）」・「描く力（未来を描き、将来像を描く力）」・「選ぶ力（必要なことを理解し自分で決断し動く力）」をつけることができた。

今後の展開

キャリア教育のためのカードゲームのみではなく、継続的に日常生活や学校生活をキャリア教育ととらえる仕組みを構築しながら、総合学習の時間にキャリア教育を実践していく学校を増やしていけるように活動していきたい。

特定非営利活動法人 SORAアニマルシェルター

団体概要	活動地域	福島県・関東地方
〒960-8076 福島県福島市町庭坂字富山147-1 TEL・FAX 0240-5290-6267 E-mail soranokizuna2017@gmail.com URL http://sora.ne.jp/sora-animal/kizuna2017/	活動分野	・環境保全 ・災害救援 ・子どもの健全育成

課題・背景

震災直後から、被災動物の保護を続けてきたが、県外の新聞・テレビ・雑誌の取材や、県内の団体の会合での講演依頼などの依頼が絶えない。昨年度仮設住宅を回っていた中で、仮設住宅の野良猫をどうすればいいかという相談を受けたり、勉強会の中では動物愛護管理法に基づいた飼養方法や、平時の防災について理解不足の部分が多く見られた。また、動物に興味があるという共通項を用いた共同体形成は強い絆を生むと考えた。

目的

避難指示後、避難指示区域の動物が避難区域内に残され、大部分が餓死した。人間の命も動物の命も重さは同じであるという気概醸成と、今後災害があっても人と動物が変わらず安全・安心に生活できるよう、人と人、人と動物の絆づくりを深めることが必要である。さらに、県外で避難者家族へのいじめが増加していることも含め、福島の理解を深め、風評被害を払拭し、福島へ足を運んでくれる人が増えることを目的とした。

取組内容・実績

【東日本大震災の動物と人にかかわる勉強会（福島県内）】

動物と人の関わりや適切な飼養方法、震災時の経験談等を、西風直美（兵庫県動物愛護推進員）をコーディネーターとして、興味のひく講師をお迎えし開催する。福島の動物問題を再確認し、ともに解決するためのネットワークづくりを目指す勉強会を開催。（全5回　のべ参加者約300名）

周知方法：チラシ、ポスター、ホームページ、SNS、広告媒体告知等

講　　師：後藤啓寿・吉田美穂・長谷川美穂・細川敦史・太田匡彦・秋保梢絵・芳賀澄恵・大和田新・杉本彩

【県外でのSORAブース出展並びにSORA写真展（関東地方）】

主に関東SORAメンバーによる、関東方面でのイベントでのブース出店（全34回　のべ来場者約15,500名）。

震災時の状況や被災動物パネル・動物防災パネル展示・チラシ配布による活動紹介。福島へのボランティア誘致。来場者へ「ふくしまの農産物」フリーペーパー（秋版・春版）を作成・配布し福島県の風評被害の払拭を目的とした。

【小学生への被災動物勉強会「いのちの授業」の開催】

福島市内の小学生とその保護者約50名を対象に、東日本大震災でどうして被災動物が生まれてしまったのか、命の大切さを教えるために「いのちの授業」を開催。

将来を担う子どもたちへ、動物の安易な放棄、それにともなう殺処分、動物の遺棄や虐待事例を伝え、動物を通じたいのちを大切にし、人と動物が共生する社会を築くことを目的とした。

場所：子どもの夢を育む施設 こむこむ

事業の成果

・震災時の動物の状況を伝えることで、災害時に被災動物ができないための平時行動と意識づけができつつある。

・勉強会を開催することで適切な飼養ができる人財が増え、捨て猫などへの周囲への警戒の輪が広がり、動物愛護先進県「福島県」へとつなぐきっかけとなった。

・わたしたちの活動を通じて「動物好き」というキーワードから新しいきずなづくりができはじめた。

・福島県の現状を伝えることで福島県の風評被害の払拭につながってきつつある。

今後の展開

SORAのきずな2017のホームページ開設、ラジオ出演での情報発信、フリーペーパー（Collarふくしま、得プレふくしま等）での告知、新聞などからの取材、フェイスブックページ、インスタグラムでの配信により、これまでの活動がさまざまな形で周知された。このことにより動物愛護への意識が高まることで、行政頼みではなく、自分たちの力で動物問題を解決できるようにしたいという仲間をもっと増やしていく。

・ペットを飼う時に自分の状況をしっかり考えて飼うことができるようになり、営利目的の繁殖や飼育放棄、保健所収容の動物が減ることを目指していく。

顔の見える関係で風評払しょく！「福島アグリ通信」収穫祭

特定非営利活動法人 がんばろう福島、農業者等の会

団体概要	活動地域	福島県・首都圏
〒964-0976 福島県二本松市新生町490 TEL 0243-24-1001・FAX 0243-24-1536 E-mail s@farm-n.jp URL http://www.farm-n.jp/	活動分野	・まちづくり ・観光振興 ・農林漁村中山間 ・経済活性化 ・消費者保護

課題・背景

震災後7年が経過するが、いまだに風評被害は続いている。これに対応するためには、より福島県の農業者と全国の消費者を直接「つなぐ」方法が必要である。

目的

定期的に福島県農業者の様子を伝える情報紙を発行するとともに、みんなが集える「収穫祭」を開催する。これにより、福島県農業者と消費者との「顔の見える関係」を構築する。

取組内容・実績

福島県内の農業者を取材、夏・秋・冬・春　計4回の情報紙（各2,000部）を発行し、県産農産物を利用いただいている首都圏の消費者等に届けた。

受け取った消費者からは「福島県農業者がより身近に感じられるようになった。今後もすえながく福島県農業とつながっていきたい。」旨の言葉も多数いただいている。

平成29年11月5日（日）二本松市内の農園において、農業者30人、首都圏消費者20人の参加により「収穫祭」を開催し、稲刈りや交流会を行った。おおいに盛り上がり、参加者全員で歌「ふるさと」を合唱する様子まで見られた。

事業の成果

震災後、全国の多くの消費者に県産農産物をご利用いただいてきたが、今回、これらの消費者に「情報誌」を同封できるようになり、より、福島県との「つながり」が強くなった。

風評被害払しょくには、このように、息長く福島県の農家と消費者が、つながっていくことが大切であり、今回の効果ははかりしれないほど大きい。

今後の展開

上記のように効果があったが、この1年間で取材した農家は、10人程度であることから、今後も取材を続け、多くの農家を全国に紹介できるよう継続していきたい。

特定非営利活動法人 フー太郎の森基金

団体概要	活動地域	相馬市
〒976-0022 福島県相馬市尾浜字南ノ入241-3 TEL・FAX 0244-38-7820 E-mail info@futaro.org URL　http://futaro.org	活動分野	・まちづくり ・文化芸術スポーツ ・子どもの健全育成

課題・背景

相馬野馬追初日、相馬市でのお行列の見学を終えると、観光客は潮干狩りと海水浴を楽しみ、翌日南相馬市で開催される甲冑競馬につないだものだ。ところが、震災以降、海での観光が壊滅的打撃を受けてしまい、観光客の滞在時間を延ばすためのファクターが欠けてしまった。そこで綱引をメインにした参加型のイベント「伊達と相馬の合戦」を始めるきっかけになった。今回の3つの活動を通じて、ボランティア登録など活動を長く継続できる仕組みを作りたい。

目的

98年から当団体は相馬市に根を張りながら、エチオピアで事業を行ってきたが、震災直後は相馬市・新地町で復興支援活動にも携わった。しかし東日本大震災以降、特にボランティアの高齢化と人材不足を感じている。そこで新たなボランティアの人材発掘と育成を目的に今回のプログラムを考えた。いくつかのボランティア活動を通して、自分が住む町を自分たちが支えているのだということを知る機会を作り、地域づくりの一員になっていくよう促していきたい。

取組内容・実績

●第5回伊達と相馬の合戦フェスティバルを通しての人づくり

新地高校、相馬東高校、福島銀行相馬支店の方がボランティアとして、134名イベントの運営に参加した。ただのイベントのお手伝いではなく、事前準備として、ゲーム選びやメニューの検討、イベント前日の準備など、実行委員として高校生が参加。綱引にもチームで参加して盛り立ててくれた。

●震災前に当団体が作ったツリーハウスは子どもたちの憩いの場になっていた。幸い、震災を免れて残ったことから、これを手直しする作業に入った。周囲にはびこる笹を除去したところ、思いのほか土台部分の風化が激しく、簡単な手直しで済まないどころか、二次災害の危険があることから取り壊しを決定。同じ敷地内にベンチとブランコを設置することに計画を変更せざるを得なかった。

●映画「March」と制作の角田寛和氏の講演会開催

映画「March」は南相馬市のマーチングバンドが主役の映画。ロンドン映画祭2017とニース映画祭2017で海外ドキュメンタリー賞を受賞。南相馬市での上映会のために市長に会う。他、県立新地高校や相馬市内の小学校での上映会もアプローチしたが、授業時間の調整がかなわず、開催に至らなかった。

事業の成果

「伊達と相馬の合戦フェスティバル」は相馬東高校と新地高校生の大活躍で大成功をおさめた。以前もボランティア参加している学生が2年目、3年目の参加をしていて、これまでの経験から、ゲームに新たな提案をしてくれたりした。確実にイベントの運営委員として育ってくれていることを実感した。

ツリーハウス建設と映画の上映に関してはタイミングを逸してしまい、学校で時間調整ができない時期になってしまったのは大変残念だった。

これらの行事とは別に、新地高校のサッカー部がフー太郎の森基金のベガルタ仙台のホームスタジアムでのボランティアに参加したり、原町高校、相馬東高校が相馬市のわくわくワールドフェスタのフー太郎のブースに参加するなど、別の動きもあったことはうれしいことだった。

今後の展開

今後もさまざまなイベントを相馬市やその周辺で行っていくが、高校を中心に学校に呼びかけをしていきたい。小さな成功を積み上げ、一つひとつ達成感を積み上げていくことがボランティアを育てていく際には大切だと感じた。

特定非営利活動法人 表郷ボランティアネットワーク

団体概要	活動地域	白河市表郷
〒961-0416 福島県白河市表郷金山字越堀151-1 TEL 0248-29-8010・FAX 0248-29-8015 E-mail borabora69_omotego@yahoo.co.jp URL http://omotego.wixsite.com/omotego	活動分野	・保健医療福祉 ・社会教育 ・まちづくり ・観光振興 ・文化芸術スポーツ ・環境保全 ・災害救援 ・地域安全 ・人権平和 ・国際協力 ・子どもの健全育成 ・情報化 ・経済活性化雇用 ・連絡助言援助 ・その他

課題・背景

東日本大震災とその後の原発事故から6年、避難指定解除地域も増え、避難者は様々な選択の時期を迎えている。その中で、地元地域ではイベントを通して、コミュニティーに馴染めるように、また近隣地域では、復興状況を理解してもらい、より交流が深まるように積極的にアクションを興していくことが肝要である。

目的

復興には、県内・県外に関わらず現状を理解・共感してもらい、応援してくれる人を増やすことが大切である。そのために、あらゆる場所でも共有できるツールの“食や芸能・音楽”を取り入れることで、心を開いてもらいやすいと考えた。併せて福島県の風評被害払拭のためには根気よく安全性を伝えるとともに、「ふくしまのものは美味しい」と感じてもらうことである。

取組内容・実績

[取組1]夏だ!まつりだ!福幸だ!ふれあい夏まつり

・交流のあるNPO埼玉ネットを通じて、加須市に避難している双葉町の方々30名が来場し、交流を深めた。
・今回も大熊町漁協女性部の方を中心に地元表郷の方々と一緒に出店してもらった。会場で集まった募金26,506円は24時間テレビへ寄付した。
・千葉県在住のグループと棚倉町出身のボーカルが演奏。

[取組2]ふれあい春の集いin表郷

・体験型イベントを充実させ、子どもからお年寄りまで楽しんでいた。
・みんなで歌おうコーナーをゲストに合わせ1年がかりで復興応援歌を練習してきたことで、より地域住民とのきずなを深めた。また当日来場者に折紙でバックの絵を作ってもらい、ステージに展示、一体感を共有した。

[取組3]復興応援交流

・震災後から交流のある福島県川内村と岩手県大槌町に出向き、福島の食と芸能で理解を深めてもらった。
・今回は、川内村では阿波踊りを、岩手県大槌町では和太鼓と地元の踊りを披露、またそれぞれで写真を展示したり、表郷の物産品をPRした。

[取組4]首都圏イベントへの参加

・埼玉県岩槻市で実施している岩槻安穏朝市に参加し、福島県の復興状況を伝え地元の食を直にアピールした。地元の金山納豆やトマトなどを試食、配布して「ふくしまの美味しいもの」を味わってもらった。

事業の成果

・食と歌・踊りで、地元のイベントや被災地各地で大変喜ばれた。直接現地を訪れたことで、温かい言葉や会話が交わせた。
・首都圏イベントを度々訪れたことで、福島県を身近に感じてもらえるようになった。
・今回の事業を通して出会いの輪が広がり、各団体の交流も促進した。
・各地で種を蒔くことで、今後の交流人口の増加につなげるとともに、「ふくしまのものは美味しい、ふくしまの人と自然はすばらしい」をアピールできた。その場に集まった人々から、口コミやSNSなどの発信を通して広く紹介してもらうことができた。またHP、広報誌、facebook、twitter、情報誌などを通して自ら発信した。また白棚線沿線カレンダーや白棚線沿線情報誌を発行、間接的ではあるが、情報を発信した。

今後の展開

・今後は、夏か春いずれかのイベントに、近隣地域から福島に来てもらえるような企画を検討している。
・引き続き、各地との交流を続ける。

特定非営利活動法人 ふくしま再生の会

団体概要	活動地域	伊達市・福島市・飯舘村
飯舘事務所：〒960-1815　福島県相馬郡飯舘村佐須字滑87 東京事務所：〒166-0001　東京都杉並区阿佐谷北1-3-6-2F1 TEL 03-6265-5850・FAX 03-6265-5859 E-mail desk@fukushima-saisei.jp URL http://www.fukushima-saisei.jp/	活動分野	・保健医療福祉 ・文化芸術スポーツ

課題・背景

ふくしま再生の会は、福島第一原発事故後の2011年6月以来、全村避難後の福島県飯舘村で、村民・ボランティア・専門家が協働して放射線被害に対応する各種の測定・各種除染の方法を継続しつつ、帰村後の生活と産業の再生の総合的な試みに取り組んでいます。2015年からは避難生活を強いられている村民への生活支援の一環として、仮設住宅訪問をはじめました。7年近くかけて仮設住宅で築いたコミュニティと絆は、帰村をする・離れ離れになっていた家族との生活を始める・他市町村へ移住するなどで崩壊し、再び生活を変えざるを得なくなっています。こうした不安を抱えている方々を孤独や孤立にしないようにすることが強く求められています。

目的

内科医・精神科医・看護師・管理栄養士・社会福祉士・介護福祉士・臨床心理士などで健康・医療ケアチームを編成。月一回訪問するところは、伊達東仮設住宅談話室、松川第一住宅集会所、そして、飯舘村佐須地区の佐須公民館・旧佐須小学校である。医師の「健康相談」、管理栄養士の「栄養相談」、看護師による「足もみ・マッサージ」、社会福祉士や臨床心理士の「よろず相談」などを実施。ゆったりとした雰囲気のなかで集まった村民同士の語らいと交流が生まれることを目的とする。

取組内容・実績

伊達東仮設住宅

2015年1月から開始。2018年2月で38回を終えた（当該事業として9回終了）。毎回10人前後の方との出会いがあります。

①足湯・足もみ・爪切りを主としたフットケア
②アロママッサージやタイ式マッサージなどを実施。
③毎月の訪問を楽しみにされ、参加される方からの持ち寄りもあり、なごやかでゆったりした交流の時間が流れていきます。

足もみのひとコマ

桜満開の談話室

松川第一仮設住宅

2015年5月から開始、2018年2月で34回を終えた（当該事業として9回終了）。毎回、20人弱の方が来られます。

①身体ほぐしのストレッチから会を始めます。

②医師の健康・予防講話や管理栄養士の簡単で免疫を高めるための食事についての話と試食会

③その後、医師の健康相談、管理栄養士の栄養相談、看護師のマッサージや足湯・足もみ・爪切り、社会福祉士や臨床心理の諸々相談、戸別訪問を行います。

施術風景

栄養を考えたお菓子づくり

健康講話

92歳の次男さんが輪投げに挑戦

栄養たっぷりのお食事

佐須公民会・旧佐須小学校

2017年5月から老人クラブと協働して健康サポート活動をスタート。当該事業として5回終了。前半は、老人クラブ主催でみんなで楽しく過ごすミニボウリングなどを実施。後半は健康医療ケアチームの「健康に過ごすために」コーナー。

医師による健康講話と昼食は管理栄養士の指導で「減塩」や「免疫力」を上げる料理を紹介、試食。8月には東大生応援部主将たちが駆けつけてくれたり、9月には似顔絵かきさんのコーナーなども大いに盛り上がりました。

事業の成果

①利用いただいている皆さんから、心身共に改善した、心身ともに安心できる感じがある、健康管理に役立つというコメントが多くありました。

②仮設住宅から帰村を考えている人たちからは、このような取組を村としても大いに力を入れてほしいとの要望があった。

③村内佐須地区で地区老人会と合同で月一度地区公民館・旧小学校で開催する集い「一緒に集まって楽しく遊びましょう」では、今まで集会がなかったが、月一度集まりができて、楽しみにしている。人との繋がりができた、などがあり、地区の拠点作りに一役買うことができた。

今後の展開

今後の展開としては

①仮設住宅への訪問は継続する。仮設住宅に住まわれる人は激減しているが、それだけに留まる必要のある入居者の方の不安は高く、不安や心配の軽減の一助として健康医療ケアチームでは月一度チームを組んで訪問をしていく方針である。

②佐須公民館・旧小学校での月一度の訪問を継続するのに加え、他地区での活動を検討している。社協や民生委員の方々と今後打ち合わせを行っていきたい。

中之作地域　町並み保存活動

特定非営利活動法人 中之作プロジェクト

団体概要	活動地域	いわき市
〒970-0313 福島県いわき市中之作字川岸10 TEL 0216-55-8177・FAX 0246-55-8178 E-mail nakanosakuproject@gmail.com URL http://nakanosaku.xsrv.jp/index.html	活動分野	・まちづくり ・地域安全

課題・背景

いわき市中之作は、東日本大震災と津波による被害を受けましたが、地形など様々な要因により奇跡的に多くの建物が残された港町です。しかし、少子化・高齢化・核家族化・過疎化などの社会問題により、港町の風景をつくる貴重な建物は修復されずに次々と壊されてしまいました。震災に耐えた貴重な港町の風景を次の世代に伝えるため、地域コミュニティの再構築と、地域に若い移住者を増やす取り組みが地域課題です。

目的

①震災に耐えた貴重な港町の風景を次の世代に伝える事
②地域コミュニティの再構築と空き家問題を解決するために地域に若い移住者を増やす取り組み

取組内容・実績

【空家を利用したコミュニティカフェづくり事業】

高台で15年以上放置された空き家を住民参加のDIY教室を実施しながら修復。

「外壁張り」「天井塗装」「断熱施工」「内装ボード張り」などを実施しました。DIYに興味がある方、コミュニティの場づくりに興味がある方が参加してくれました。また、県外の大学生も参加し、地元の方との交流もできました。

DIY教室は再生作業に積極的に関わる移住希望者とのコミュニケーションの場としても機能しました。

【農業体験による教室・中之作のライフスタイルの提案】

市内に畑を借り、野菜作りをしました。「ピザ窯作り」も同時進行で行い、秋には収穫した野菜で【収穫祭】を開催。ピザ作り体験会も行いました。

また、昨年同様もち米づくりを住民参加で手植えから行い、稲刈り、脱穀、年末には【餅つき大会】を開催し、もち米づくりに参加した地元小学生や近隣の方につきたての餅を振る舞いました。

【空き家問題解決に向けた取り組み】

中之作の空き家を対象に、空き家所有者を探し、建物の今後について調査しました。貸し出すことのできる空き家を【空き家バンク】に登録し、借りたい人とのマッチングを目指しました。

事業の成果

今年度は野菜作り、ピザ釜作り、収穫祭など例年よりさらに挑戦をしてきました。地域の課題についても、事業を通じて地域の方と再認識できたように感じます。中之作には空き家が多くありますが、所有者になかなか行きつかないのと、行きついても「貸す」のに抵抗があるとの事で、まだマッチングまでは至っていない状況です。

空き家を活用したコミュニティカフェづくりは、外壁張り教室などを計12回開催。延べ約100名が参加しました。工程がだいぶ進み、今年秋には完成の予定です。

今後の展開

空き家修復作業で利用可能となった建物を、次年度秋を目標にコミュニティの場として開業する予定です。地元の主婦（震災後機能していない漁協婦人部など）を巻き込んで満月の夜に交流会の開催や、子育てママ向けの片手で食べられる「サンドイッチ」やカフェインが少ない「飲み物」を主体にしたカフェ運営をイメージしています。

震災後、飲食店が無くなり、電気屋さんやタバコ屋さんも相次いで閉業してしまった事からコミュニティカフェの開業を楽しみにしている地元の方の声が増えてきました。

特定非営利活動法人 Social Net Project MOVE

団体概要	活動地域	福島県内・東京都港区
〒107-0062 東京都港区南青山1-26-16-501 TEL 03-5474-7558　FAX 03-5474-1461 E-mail for01@themis.ocn.ne.jp URL http://www.smartcitymove.com/	活動分野	・社会教育　・まちづくり ・農林漁村中山間　・文化芸術スポーツ ・環境保全　・地域安全　・人権平和 ・子どもの健全育成　・情報化 ・科学技術　・その他

課題・背景

1.次世代育成の必要性
震災と原子力災害によって地域力が失われた。失われた地域力をどう回復し、これを次世代にどう引き継いでいくか。時間経過とともに、それが緊急課題のひとつといえる。

2.都市と地方の新しい連携の必要性
都市依存によって、地方独自の食、文化、地域的つながりは変容した。震災、原子力災害を契機に、この再生、新生をどう進めるかは都市と地方の共有課題といえる。

目的

東京都港区を中心とした首都圏と福島県の児童・生徒・保護者・地域教育関係者の相互交流の場を創造し、農水産・食・伝統芸能・文化など、地方文化の発信を通じて、その魅力を互いに理解し、連携促進を行う福島県が得た教訓と知恵を地方自立の新しいFUKUSHIMA MODELとして示し、都市を支える地方の重要性を都市生活者に理解させ、都市と地方の物流を越えた、人の連携を創造する。

取組内容・実績

1.事　業　名：**取組1「ふくしまみなと未来塾会議」**

2.開催日時：第1回会議　平成29年11月11日 16:00～17:00
第2回会議　平成30年 1月11日 16:00～17:00
第3回会議　平成30年 1月21日 14:30～15:30

3.会　　場：港区立青山中学校

4.参加団体・参加者数：
①第1回会議　福島県東京事務所・いわき市東京事務所・港区赤坂総合支所協働推進課・港区全国連携推進担当課・港区青少年対策地区委員会ほか（参加人数12名）
②第2回会議　福島県東京事務所・いわき市東京事務所・港区全国連携推進担当ほか（参加人数10名）
③第3回会議　いわき市下平窪地区平窪伝統祭典保存会子どもじゃんがら念仏踊りの児童・保護者・地域関係者/福島県立安積黎明高校合唱部生徒/福島県立湯本高校吹奏楽部生徒/港区立青山中学校生徒ほか（参加人数170名）

5.実　　績：
2020年度東京オリンピック開催時まで、「ふくしまみなと未来塾」の持続、継続へ向けた目的と実施意欲の共有、及び組織づくりの基盤ができた。

1.事 業 名：**取組2「ふくしまみなと未来塾　浜の文化を知ろう」**
2.開催日時：平成29年8月5・6日　5日13:00～6日15:30
（1泊2日応募抽選によるバスによるスタディツアー※応募者数350名程度）
3.会　　場：①相馬市相馬双葉漁協会議室　②いわき市沼ノ内公民館　③塩屋崎灯台
④薄磯海水浴場
4.参加団体・参加者数：
相馬双葉漁協青壮年部・原釜敬神部・大野村農園・いわき市沼ノ内区・海まちとよま市民会議・福島県漁協女性部連絡協議会・沼ノ内区伝統芸能保存会子ども獅子舞・下平窪祭典保存会子どもじゃんがら念仏踊り・港区内小中学生児童、生徒、保護者・港区内在住勤務青年社会人、学生・首都圏在住青年社会人、学生（港区・首都圏からの参加者83名/福島県内の参加者80名　計163名）
5.実　　績：自然の恵みとしての漁業・農業。自然環境の上に食と生活が成り立ち、地方の地域力が都市を支え合っている現実を学び、互いがつながっていることを実感し合うことができた。

1.事 業 名：**取組3「ふくしまみなと未来塾　環境への取り組みを知ろう」**
2.開催日時：平成29年10月29日12:00～16:00
（応募抽選による日帰りスタディバスツアー※応募数60名程度）
3.会　　場：①二本松市ふくしま農家の夢ワイン㈱会議室
②福島県環境創造センターコミュタン福島
4.参加団体・参加者数：
ふくしま農家の夢ワイン㈱・大野村農園・菓子処まつもと・ホテルハマツ・鈴木農園・㈱御稲プライマル・オーガニック安達・福島県環境創造センターコミュタン福島・港区内小中学生児童、生徒、保護者、青年社会人（受け入れ参加11名港区からの参加37名　計48名）
5.実　　績：循環型の有機農業とエネルギー創造事業が限りある資源を未来へつなぎ、次世代へ安全で豊かな環境を継承する力があることを学び、都市生活のあり方を福島の姿からより学ぼうという契機になった。

1.事 業 名：**取組4「ふくしまみなと未来塾　交流フェア」**
2.開催日時：平成30年1月21日12:00～15:30
3.会　　場：港区立青山中学校
4.参加団体・参加者数：
下平窪祭典保存会子どもじゃんがら念仏踊り・福島県立安積黎明高校合唱部・福島県立湯本高校吹奏楽部・福島県漁協女性部連絡協議会・港区青少年対策青山地区委員会・福島県東京事務所・いわき市東京事務所・いわき商工会議所・港区全国連携推進担当・港区赤坂総合支所協働推進課・港区福島県人会・東京福島県人会・港区内小中学生及び保護者・港区立青山中学校PTA（参加者数209名）
5.実　　績：食・伝統芸能・文化を通して、言葉以上に福島に生きる児童・生徒たちの地域への思いを参加者が体感した。東京オリンピック開催時、港区を拠点に世界に福島を発信する意志を共有できた。

事業の成果

1.「ふくしまみなと未来塾会議」の枠組みの構築達成
「ふくしまみなと未来塾」を関係団体と協働する枠組みができた。
2.「ふくしまみなと未来塾」の目的、主旨を広く共有
福島（地方）と港区（都市）との生活文化交流による連携づくりを意図したものであることを共有できた。
3. 次世代を主役とした取組の必要性の共有
震災・原発事故からの再生は、いますぐに解決できる問題ではなく、次の世代へ福島の挑戦と知恵を地方と都市の垣根を越えて、共有することが重要であることを共有することができた。

今後の展開

1.「ふくしまみなと未来会議」の拡大と進化
「ふくしまみなと未来塾会議」の参加団体を拡大し、持続可能性を確立、強化する。
2.文化交流発信コンテンツの多様化と文化イベントの開催
①福島県内の子ども伝統芸能や合唱・吹奏楽参加地域を拡大し、東京都内からの参加も促進する。
②環境・新エネルギー学習をより大きく取り上げていくほか、他分野での交流事業の開発を進める。
③2020年東京オリンピック開催時、震災・原子力災害から10年の福島（地方文化）を港区・首都圏（都市）で発信する。
3.実行委員会形式の事業立案と実施運営へ
MOVE主導から、徐々にその業務を福島県内団体、港区・首都圏団体や住民へと移行し、運営できる形式へと移行していく。

特定非営利活動法人 ふたば創造未来塾

団体概要
〒969-1104 福島県本宮市荒井字恵向121-6 TEL・FAX 0243-24-8552 E-mail futaba-souzou8@ktf.biglobe.ne.jp URL http://www.futaba-souzou.org

活動地域	県内
活動分野	・社会教育　・まちづくり ・観光振興 ・文化芸術スポーツ ・地域安全 ・子どもの健全育成

課題・背景

東日本大震災と原発災害により、避難を余儀なくされた双葉地方の住民の絆維持に努めるとともに、帰還する住民の不安解消を図る。

また、地域振興を8町村の広域的な視点から考え、世界に誇ることができる復興を目標に官民一体で進めるべき事業の糸口を見い出す。

目的

原発の廃炉作業と地域づくりは同時並行して進めなければならないため、住民自らが30年後のふるさとを見据え、在り方を考える機会をつくる。

同時に、避難指示解除時期によって復興進度に開きがあるため、町村の連携強化を目指す。

取組内容・実績

●双葉地方の広域広報紙を発行

8町村それぞれの11月1日現在の復興状況がひと目でわかる広報紙を制作。各町村広報紙の新年号に合わせ、避難先を含む双葉地方全世帯に配布した。計約32,000部。

編集に当たっては8町村と連携、協力を得た。

＊広報紙完成のニュースは12月25日付福島民報、福島民友に掲載された（写真）

●市民菜園で生きがい育てよう

郡山市熱海町にある個人所有の遊休地を借り、市民菜園として開放する、被災者の交流拠点「きずなの杜」づくりを目指した。あいにく夏場の長雨で表土がぬかるみ、除草作業ばかりで重機による整地作業に着手できなかった。

秋に枝落としなどの全体作業と交流会を開き、次年での整備方法など話し合った。

●夢をもってたくましく生きよう

ふたば地方の現在(いま)を見聞するバスツアーを平成30年3月28日に実施。約70人が参加予定。(3月6日付福島民報、福島民友に募集記事掲載)

また、昨年8月と本年2月に8町村の若手職員を集め、現状と課題、将来期待するふるさと像などを話し合い、夢のある地域づくりへ機運を高めた。同時に町村連携のネットワークづくりに努めた。いずれも楢葉町で開催。(写真は2月の様子)

事業の成果

広報紙は当初予定通りデータを盛ることはできたが、時間がなく24頁から20頁に減らさざるを得なかった。一方、町村との連携を図ることができ、次号以降はスムーズに編集作業が進められそうだ。

きずなの杜事業は、農業経験のある当法人メンバーの助言を受け、少しずつ整備することができた。イノシシによる被害もあり用途については再検討する。

バスツアーは高齢者に好評で、ふるさと訪問のニーズは高いと感じた。被災者以外からの参加問い合わせも多く、できることなら対象者の拡大も検討したい。

今後の展開

予算確保が前提だが、広報紙は年2回の発行にして家族が避難先から集うお盆とお正月の話題となるよう、紙面の充実に努めたい。同時にふるさとへの関心が失せないよう魅力的な情報紙にしていきたい。

町村職員との意見交換会は、回を重ねることでよりネットワークが強化されるため、継続していきたい。また、若手職員とは別に広報担当者との研修・交流会も企画していきたい。

特定非営利活動法人 相馬はらがま朝市クラブ

団体概要	活動地域	相馬市
〒976-0042 福島県相馬市原釜字金草50-5 TEL 0244-26-9127・FAX 0244-26-6567 E-mail nakatani@somamirai.net URL https://www.facebook.com/somamirai/	活動分野	・まちづくり ・経済活性化 ・その他

課題・背景

東日本大震災により相双地域は津波被害のみならず放射能による甚大な被害を受け、地域コミュニティと共に沿岸漁業をはじめとした全産業が崩壊した。復旧から復興への移行の中で住民ニーズは「住居」「心の問題」から「仕事再開」「産業創出」へと移り変っているが、産業の復興状況や事業者の課題が未整理状態であり、事業者同士の連携、或いは事業者と支援者とのマッチングが生まれ難く、産業創出が促進されない状況が続いている。

目的

事業者の生の声を拾い、産業復興状況と事業者の課題を整理＆情報発信し、県内外の人々に正確に理解していただき、事業者同士の連携や支援者とのマッチングにより復興を加速させること。更に、産業活性化や新事業創出の為に、「生の声」に加えて透明性のある幅広い行政のオープンデータを使用した産業と暮らしの解析と、そのデータを活用した事業者と支援企業/団体等との話し合いの場を作り連携を生み出すこと。

取組内容・実績

1. 県内外ボランティアの街歩きによる「市内事業者訪問と生の声聴取」の実施

- 6/6～9/1の間に県内外からボランティア（RockCorps等と連携）105名を受入れ、市内事業所を個別訪問し120件のアンケート調査実施。
- 事業者から、①基本的な営業情報、②震災前後の営業変化、③現在の課題＆支援要望等の生の声を収集した。
- 一般ボランティアの方々に、街歩きを通じて事業者と触れ合い、生の声を聴くことで、復興状況や課題を直接肌で感じていただいた。

2. 産業復興状況＆事業者課題の把握と見える化（事業者データベース＆マップ構築）

●事業者の生の声をベースにした①事業者データベースの構築と、②事業者マップ（全営業/廃業事業所立地分布、産業別立地動向、地域別立地密度、空き店舗状況等）の作成により復興状況と課題を見える化して、事業者同士の連携や支援者とのマッチング精度をアップさせる取り組みである。

●相馬市の全事業所（2014年経済センサス：1,745件）の内、2018.2末時点で1,582件（約91%）の営業確認、アンケート実施件数は総数730件（約42%）に達した。

●概要として、約54%の事業者が震災前よりも経営状況が悪化した状態で、支援に関しては①スタッフ確保、②風評被害払拭への要望が多いことが確認できた。

3. オープンデータまとめ＆解析による復興状況の見える化（相馬Indexのまとめと発信）

●事業者の要望をヒアリングした「生の声」に加えて、透明性のある幅広い行政のオープンデータを使用し、相馬市の震災からの復興状況を明確にするためにオープンデータブック「相馬INDEX2018」を作成。

●県、市、漁協、旅館組合やJA等多くの方々にもご協力いただき必要な生データを収集、また相馬市のオープンデータに関しては、女川データブックの作成にも携わった専門家のサポートをいただきデータを収集、解析、グラフ作成を実施。

●データブックは、生徒や学生も含めたより多くの人々に見ていただけるよう全体のデザインや佇まい等についても工夫を凝らした。

●今後、地元事業者、支援団体、市役所、市民、学校、NPO/市民団体等によるステークホルダー会議「そうま未来づくりミーティング」を開催して、皆様のご意見をいただく。

事業の成果

●一般ボランティアの街歩きで収集した「生の声」と、幅広い行政オープンデータの解析との両方により正確な復興状況や課題が見える化できた。

●データブック「相馬INDEX2018」の完成により、多くの方々へ正確な復興状況や課題を発信することができ、今後を考えるきっかけにしていただける。

●ステークホルダー会議開催により、事業者同士の連携や支援者とのマッチング精度をアップさせ新商品開発＆産業創出を加速させる。

●ボランティアの方々が事業者と触れ合い生の声を聴くことで、震災からの復興状態や課題を直接肌で感じることができ、現地状況の正確な理解と情報発信や支援活動の拡大が期待できる。また、県内外への情報発信により風評被害払拭への波及効果も期待できる。

今後の展開

●業者調査＆ヒアリングは来年度以降も継続実施が必要であり、また、オープンデータブックについても一年毎の更新も重要であり、最新データに基づく事業者同士の連携＆支援者とのマッチングを継続させていく。

●データを含めた色々な分野で他事業体（一般社団法人Bridge for Fukushima、NPO法人アスヘノキボウ等）とは連携中であり、今後も協力して当活動を相馬市だけではなく相双全域へ展開拡大していきたい。

特定非営利活動法人 市民公益活動パートナーズ

団体概要	活動地域	福島県全域
〒960-8101 福島県福島市上町3番4号　コマ福島ビル9号 TEL024-573-8310・FAX 024-573-8319 E-mail info@partners-npo.jp URL http://partners-npo.jp/	活動分野	・連絡助言援助

課題・背景

課題　3.11から7年が経過し、被災・避難者支援から住民主体の地域再生・復興に向けたステージへの変化に伴い、これまで被災者支援の中心的な役割を担ってきた地域活動・復興支援団体は支援活動の転換期を迎えていること。

背景など　県内の地域活動・復興支援活動団体に向けた詳細な調査はいまだ行われておらず、どのような団体がどんな活動を行っているのか、充分に把握されていない現状がある。

このため、地域において連携や協働が遅々として進まない大きな要因になっていると思われることから、被災地における支援が大きく変化しつつある今こそ、将来に向けた長期的な福島の復興・地域再生のために地域活動団体等の情報を整理し、県内外に発信する。

目的

県内の様々な地域活動団体や復興支援活動団体が抱える課題や今後の展望等を巡回聞き取り調査によって明らかにし、研修・交流の機会の提供や調査結果の情報発信を行い、これからの地域再生を担う団体と県民とをつなぐことを目指す。

取組内容・実績

1.「NPOキャラバン」巡回相談・調査

- 県内の地域活動団体（任意団体）やNPO法人、一般社団法人等100団体を目標に、平成29年7月～平成30年1月までの約7ヶ月間、毎月15団体程度を訪問・調査する。
- 団体役員や事務局長等に団体・活動概要などを調査しながら、現在抱える課題等についても情報交換を行い、併せて組織運営や支援活動における相談も実施する。

＜実績＞

調査の準備や訪問の日程調整等に思いの他時間がかかり、実施開始が遅れたが、各地域の中間支援や市民活動支援センター等のサポートを得ながら、約100団体に対し取材、相談対応等を行った。

複数回に亘った相談業務

2.福島の地域活動団体等の交流・研修機会の提供

「互いに学ぶNPO研修・交流会」：県内3エリアにおいて各1回実施

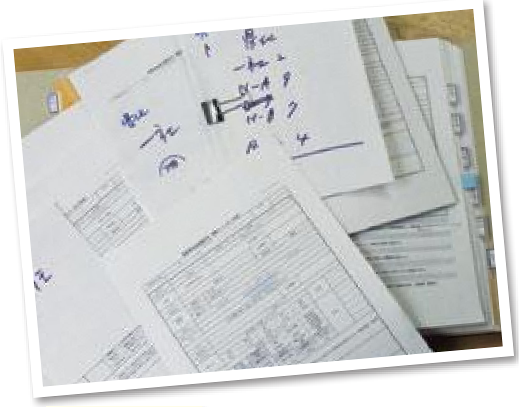
・研修テーマは「自立・自律を目指す組織運営」とし、各地域の中間支援組織と連携・協力しながら団体のニーズの把握を行い、研修会のプログラムや交流会の仕掛けを工夫する。
・講座形式による一方的な研修ではなく、ワークショップ技法を用いた双方向の研修・交流会とする。

＜実績＞
2017年9月3日「認定NPOサミット」
　郡山市（郡山商工会議所）
　参加人数：18人
　協力団体：県内の認定NPO法人及び特例認定NPO法人
2017年11月23日「NPOの寿命」
　会津若松市（会津アピオ会議室）
　参加人数：8人
　協力団体：喜多方市市民活動サポートセンター（NPO法人
　　　　　　喜多方市市民活動サポートネットワーク）
2018年2月10日「法人格の選び方」
　いわき市（いわき市福祉センター会議室）
　参加人数：9人
　協力団体（広報）：NPO法人みんぷく

コーディネーター（兼ファシリテーター/3回共）：
スタジオ・ファイル代表（認定NPO法人新潟NPO協会前代表理事）金子洋二氏
話題提供：当法人副代表理事　松田英明

会津

いわき


集約される調査票

3.福島の地域活動団体等の情報発信、データベース構築

●おたがいさま新聞［隔月発行］・「復興支援情報ステーションNEWS」掲載（情報発信）
「NPOキャラバン」や「NPO研修・交流会」で調査した団体情報を掲載し、新たな地域コミュニティづくりに取り組む自治会等へ提供する。
●活動団体情報の蓄積―ブックレットの制作とデータベース（DB）構築
事業において調査・収集した情報を集約し、ブックレットにまとめると共に、DBとして当法人HPで公開し、広く県民に提供する。

＜実績＞
●活動期間中に10団体を取材し、おたがいさま新聞各号に2団体ずつ掲載（紹介）した。
●ブックレットには、調査100団体に加えて、基礎データを集約した県内活動団体を掲載。加えて「復興支援情報ステーションNEWS」に掲載済団体についても収録。
当法人HPへのDBアップ作業も同時に行った。（3月末公開）

事業の成果

1.「NPOキャラバン」巡回相談・調査
　県内7方部の地域活動団体はNPO法人や公益団体、社会福祉法人、市民活動団体（任意団体）を含めると相当数になり、全てとの連携はできなかったものの、組織運営や活動の現状を知り、かつ多くの団体とのネットワークを深めることができたこと。
2.福島の地域活動団体等の交流・研修機会の提供
　組織運営に関するテーマをかなり絞って呼びかけを行い、参加人数は振るわなかったものの緊密な情報交換ができたこと。また、団体への相談業務や事業のサポートに発展した事例やNPO法人認証業務を担う自治体から研修会開催のオファーもあったこと。
3.福島の地域活動団体等の情報発信、データベース構築
　調査約100団体、基本情報掲載（紹介）約100団体をまとめることによって、県内における地域活動・社会貢献活動をある程度可視化することができたこと。

今後の展開

○調査と情報発信の継続
　この事業を基盤に今後も自主事業を中心として巡回相談・調査活動を継続し、定期的な情報更新と当法人の相談業務のスキルアップ等に努めること。
○交流・研修機会の継続した実施
　インターネットサイトやSNSによって県内のさまざまな団体は繋がっていると思われるが、やはり顔を合せて日頃の課題や疑問を解決する場づくりは求められているところであり、中間支援として今後もさまざまなテーマを投げかけ、議論の場を創っていくこと。

人と人、人と動物との絆づくり。
被災者及び高齢者が安心して動物（犬猫）と共生できる社会づくり事業

特定非営利活動法人 白河花里倶楽部

団体概要	活動地域	福島県県南地域
〒961-0916 福島県白河市東前町1-62 TEL090-6454-2121・FAX 0248-22-4686 E-mail tancobu52@i.softbank.jp URL https://shirakawa-hanasato.jimdo.com/	活動分野	・まちづくり ・観光振興 ・環境保全 ・地域安全 ・子どもの健全育成 ・その他（動物愛護）

課題・背景

東日本大震災により、暮らす場所の変更を余儀なくされた被災者及び高齢者の一部は、孤独感を紛らわすためにペットに依存する傾向がみられるが、適正飼育が困難な場合もあり、近隣から孤立を深め、より孤独に陥るケースもある。

家族同然のペットに関して深い悩みを持つ方々の相談を受け、地方公共団体・対象者・当会とのネットワークを構築しなければ、孤独死が増加し、心穏やかな生活を送れない被災者や高齢者を増やすことになると思われる。

目的

ペットを愛する高齢者・被災者・障がい者の憂いや悩み、孤独感を減らし、命を尊びながら、人もペットも共に笑顔で暮らせる社会にすることを目的とする。

取組内容・実績

相談及び交流会事業

普段、相談等をいただいた方で、動物に関しての悩みを聴き、わかるものについては、即時にアドバイスを。専門的なものについては、当団体が業務委託している獣医師に連絡し、アドバイスを伝えたり、特殊なものについては直接連絡が取れるよう取り計らいをし、会員の不安を少しでも和らげられるような活動をしました。

本活動は11月から毎月1回開催しています。

職員による日常相談と訪問事業

毎日、会員及び住民の方から団体専用の携帯で動物に関する相談を受付しています。また、会員や相談があったお宅を訪問し、会員宅には月1・2度訪問し、動物たちの健康状態はもちろん、会員様の健康状態や近況報告をお伺いし、体調等の変化はないか見守っています。

獣医師による被災者及び独居高齢者家庭ペット訪問事業

毎月1回、問題のある動物を抱えている会員や諸事情で交通手段がない高齢者等で動物病院に通えない会員宅を獣医師とともに訪問し、動物の診察等をしています。

この診察・相談業務は、ことのほか評判がよく、重病であったものや交通事故にあったペットを診察・治療したこともありました。

事業の成果

成果としては、ペットの医療を受けたことがないまま孤独感を深め、一人思い悩んでいた方々が、気軽に獣医師の診察を受け、会話をすることにより、当会との信頼関係も増しました。その信頼関係の中で、会員だけでなく、近隣や友人などが抱えるペットに関しての問題についても、相談をいただきました。また、シニア世代は、情報が少ないことが多いため、各種行政機関と連携し、適切な情報を提供することにより、信頼関係を構築することができました。高齢者の方々は、さみしさから野良猫に餌付けをし近隣から苦情になっているケースが多くあります。これに関しても、スタッフ及び獣医師と接する中で、意識を変える方が増えてきました。活動により、孤立を防ぎ、憂いを減らし、笑顔を増やすことができました。

今後の展開

今後の展開としては、先進諸国のように、低所得者向けの低額動物病院を常設することが、目標の一つとなります。高齢者・障がい者の方々の中には、費用がネックとなりペットに医療を与えることができず、悩んでいる方がいらっしゃいます。また、今回の活動中にも、施設入所に伴う高齢者ペットの引取り等が数件ありました。他にも、高齢者の入院や死亡に伴うペットの引取り依頼がありましたが、世話する人員不足、収容シェルターなどがないため、お断り致しました。今後、シェルターを建設し、より多くの要望にお応えしたいと思います。同時に、活動を多くの方々に伝え、社会の理解を深め、シニアボランティアを増やしていきたいと考えております。動物に癒やしを感じる人が増えている昨今、ペットの福祉は人の笑顔・福祉につながります。

福島県外での情報発信活動により、風評被害を払拭し、首都圏と福島を結ぶ事業

NPO法人 ふくしま30年プロジェクト

団体概要	活動地域	福島県外
〒960-0112 福島県福島市南矢野目字夜梨4-1 TEL 024-573-5697・FAX 024-573-5698 E-mail info@fukushima-30year-project.org URL　http://fukushima-30year-project.org/	活動分野	・子どもの健全育成 ・その他

課題・背景

福島第一原発事故から7年目を迎え、多くの農産品から放射能が不検出となり安全への意識が広がっている。しかし、首都圏在住者には福島県の情報が原発事故当時のまま更新されていない例が往々にしてある。特に、福島県に関心を持ち、支援をしたいと考えている方々には、きめの細かい情報が十分に行き渡っているとは言いがたい。

目的

県外からの福島県に対しての偏見、風評被害は根深いものがある。これら負の評判を払拭するためには、マスコミを使っての大々的な情報発信だけでは正しい情報が伝わるのは難しいと思われる。まず、福島県に関心を持つ首都圏在住者に、市民視点での適切な情報を発信し、草の根レベルのネットワークで広める必要がある。「福島」に関心を持つ方々に、現在の「福島」の情報を提供し、そこから風評の払拭を進める。

取組内容・実績

福島県に関心を持つ首都圏在住者に、福島を取り巻く最新の状況や放射能の測定データを伝える研修・交流をする会を年度内に二回行ない、原発事故からの回復、復旧の判断材料を提供する。

実績

第一回

日　程：7月22日(土)
会　場：加瀬倉庫/新宿三丁目ホール
参加者：11名

第二回

日　程：12月10日(日)
会　場：「ハモニカ横丁ミタカ」内MOSKOW(モスクワ)
参加者：34名(そのうち、避難者の参加5名)

福島県を取り巻く最新の状況や放射能の測定データを漫画という、多彩な情報を分かりやすく伝える媒体を通して首都圏での研修・交流をする会での使用、及び頒布を行ない、福島県の現状を広く知ってもらう。

実績

2,000部発行

上記、活動1において頒布。

また、15団体に発送、頒布協力をお願いした。

福島県内の子育てをする母の視点では、洗濯物を外干した時に付着する放射性物質など、生活用品を測定した数値に関心がある。このことは、首都圏在住者にとっても同じことなので、生活用品を使っての放射能測定をして安心・安全性を確認して情報発信を行なう。

実績

48時間(2日)と168時間(7日)の外干しを行なった2種類のタオルに付着した放射性セシウムを測定。

参　加　者：25名

検体測定数：30検体(15セット)

検出限界値：1キログラムあたり0.4ベクレル

検出したタオル：6セット

検出した放射能の数値は、セシウム137について、1キログラムあたり0.44ベクレル～4.94ベクレル

事業の成果

●活動1　第一回目を新宿で開催したが、この日は都内で福島関連の催しがいくつか重なっていたこともあり、参加者が11名と少なめであった。しかし、その分、一人ひとりが発言できる充実した話し合いの場が持てたように感じる。第二回目は三鷹市で開催したが、前回の参加者数を反省して日程を調整した結果、34名の参加者があった。

内容については、主催側にとっても、福島のことを知りたいと感じている方々の話を聞くのは励みになり、参加者と一緒に語れたことが印象に残った。福島に関心を持ってくれる人たちと、疑問に思うこと、共感できること、そうでないことなどを語り合える場が作れたことは大きな収穫だった。

●活動2　漫画は、各所から分かりやすいと高評価を得た。これは、執筆をした井上きみどりさんの力に負うところが大きいのだが、打ち合わせや取材が上手く機能した結果だと思われる。

●活動3　福島市と伊達市の方々に測定に参加してもらい、外干しをしたタオル(洗濯物)に放射性セシウムが付着する濃度について、経年の変化を見ることができた。多くのタオルが不検出、もしくは微量な数値の検出だった。

今後の展開

活動1については、首都圏の複数の団体から開催の希望が来ており、予算と時期を検討しながら継続していきたい。活動3については、現在、放射性セシウムの検出は地区の環境の影響が大きいため、その中で比較的高めの数値を検出した地区は、今後も測定を継続して観察していく。

特定非営利活動法人 ツークンフトロカール

団体概要	活動地域	石川郡・いわき市
〒972-8325 福島県いわき市常磐白鳥町北蟹打33番地 TEL・FAX 0246-44-4079 E-mail zukunft_lokal_ym@yahoo.co.jp URL http://zukunft-lokal.org/	活動分野	・まちづくり ・文化芸術スポーツ ・子どもの健全育成

課題・背景

震災直後、大人たちは復興事業に専念し、子ども達は自主避難や放射能問題を警戒し地域でのスポーツ・文化活動が自粛された時期があった。そのことにより地域活動は中断され今では指導者が復活する事は少なくなり、子ども達の参加も激減した。一度崩壊したコミュニティの再構築は難しく子ども達は、肥満、いじめ(県外を含む)、良質の指導が受けられないなど課題を抱えている。

目的

本事業では、子ども達への直接的な指導体制を整えると共に任意団体として活動を行っている県内外の復興支援ボランティア団体をサポートし、子ども達のスポーツ・文化活動の環境改善を図り、子ども達の夢の実現や笑顔で風評被害を払拭する。

取組内容・実績

マケルモンカ福島復興サッカーフェスティバル

福島県内外より1,000名の選手、指導者、保護者が集い行われた。そのフェスティバル参加、準備スタッフをはじめとする全ての方々との交流と東日本大震災の記憶を継承するとともに風評被害を払拭することを目的に活動した。

風評被害にも負けず震災復興にむけ力強く前進している姿を見せることができた。

福島・刈谷交流合宿

昨年度は、刈谷地区の皆様からのご協力により子ども達は何不自由なく活動を終えることができました。しかし「被災地交流とはこれで良いのか」の反省から今年度は「不十分・不自由を楽しむ」をテーマに掲げ子ども達も地域ボランティア活動を行い、被災地の復興を担うリーダーを育成することとした。

福島県からの子ども達の他、千葉県、そして海外の子ども達、さらに刈谷の一般ボランティアスタッフ・子ども達も参加し、それぞれの地区の子ども達が5人一組のグループを作り地域での困りごとを支援するボランティア活動を行い、その後、共に活動を行った仲間とスポーツ活動を行いました。

クリスマスコンサート

子ども達も社会の一員として地域活動に参加し、活動を通して自分達が地域社会に支えられていることが実感できる活動。

また、被災地復興にはまだまだ10年、20年の年月が必要と言われている。被災地では町の未来を担う地元出身のリーダーの育成することを目的とする。

歌やダンスによる芸術文化活動。
満員の観衆にて終了することができた。

事業の成果

原子力災害の影響により風評被害が生じているが、子ども達のスポーツ・文化交流を実施することにより、県外から年間2,000名以上の子ども達が訪れ福島県内にて福島県の子ども達との交流が一般化されつつある。

福島県へ子ども達を入県させることを躊躇していた県外の保護者に対し安全であることが身をもって実感してもらうことができた。また、県外へ避難している家族へも安心感が伝える効果が広がっていく。また、在日の外国人の子ども達とのスポーツ・文化交流活動を行うことにより国内外の外国の方々へ生の声を届けることができた。

今後の展開

いつまでも被災地として立ち止まることはできない。公共性のある活動を通して公益を上げる活動という活動実績の蓄積を行い、自主活動を通して自立できる組織創りを行う。その為には、スポーツ・文化活動を社会福祉活動の一環として捉え事業をマネージメントできる人材の育成と市民の誰もが集え、スポーツや文化活動を行いカフェテラスで語らうことができるクラブハウスの設置を行う。

浜と暮らしの物語
～つなぐ・つなげる・つたえる 潮目のまちのプロジェクト～

特定非営利活動法人 Wunder ground

団体概要
新住所／〒970-8026　福島県いわき市平字白銀2-10 TATAKIAGE BASE201 H29.6.1時点住所／〒971-8187　福島県いわき市葉山二丁目22番地10 TEL・FAX 090-5849-5347 E-mail info@wangura.com　URL http://iwaki.wangura.net/

活動地域	いわき市久之浜
活動分野	・社会教育 ・まちづくり ・農林漁村中山間 ・文化芸術スポーツ

課題・背景

かつて漁業を町の生業や文化の中心としてきたいわき市北部に位置する久之浜だが、東日本大震災による津波の被害は大きく、放射能による先の見えない不安や風評被害により、漁業後継者は減少の一途をたどっている。

さらには、漁業を中心としたコミュニティも解体しつつあり、久之浜において漁業の衰退はまちの衰退に直結した問題である。また震災以前の町の姿を知らない子ども世代の増加など、漁業文化の衰退にも拍車がかかっている。

目的

そこで本事業では、①子どもたちによる「大漁久之浜―手づくり大図鑑―」の冊子の作成を通じた漁業文化の継承と、漁業を通じた地域コミュニティの再構築、および②今後久之浜において、どのように漁業を中心とした地域づくりを展開していくかを学ぶためのトークイベント「浜のくらしスタイル」を開催した。

取組内容・実績

①【漁業冊子の作成】

久之浜在住の小学生を主体として、「大漁久之浜―手づくり大図鑑―」の作成を行った。

久之浜の漁港や魚屋などを探検し、地元の大人たちに教わりながら久之浜の漁業の特徴や漁港に住む生き物などを調べ、5ヶ月間にわたって子どもたち自身が1冊の本にまとめ上げるプロジェクト。最終回は地元の大人たちに向けて図鑑のおひろめ発表を実施した。

できあがった冊子は久之浜

各所に配布し、またいわき市立図書館への寄贈も行った。高い評価を受け各メディアでも取り上げられたこともあり、本事業を通して多くの市民が漁業に関心を持つきっかけと、作成に携わった子ども・漁師らが久之浜の漁業に対して誇りをもつ契機を生んだ。

③【トークイベント「浜の暮らしスタイル」の実施】

気仙沼市唐桑町と青森県八戸市からゲストを招き、漁業の町ならではの取り組みについて学ぶためのトークイベントを実施。

それぞれの地域での事例紹介や、質疑応答での参加者とゲストの意見交換を通して、外の視点を活かした「久之浜のこれからのまちづくり」について考える契機を生んだ。

第1回 「浜の魅力の伝え方～久之浜についてみんなで考えよう～」

第2回 「浜の魅力の見つけ方～浜の“くらし”から“アート”まで～」

事業の成果

本事業での取り組みが新聞・テレビ・ネットニュース等に掲載されたことにより、久之浜はもとより全国に向けて久之浜の漁業の現状についての発信がなされ、高い関心が寄せられた。またその反響も大きく、行政や飲食店、教育機関など多くの団体から問い合わせがあり、水産業を軸として幅広いジャンルに渡ったネットワークを構築することができた。

今後の展開

今後は生産者（漁師）・流通・加工・販売業者などと連携し、検査体制含めその過程を可視化・発信することで消費者に対して正しい情報を提供し、魚の消費拡大、ひいては漁業に携わる市民の雇用拡大へとつなげたい。

スタディツアーや農業体験による交流人口の創出・風評払拭促進事業

特定非営利活動法人 福島県有機農業ネットワーク

団体概要
〒964-0871 福島県二本松市成田町1-511 TEL 0243-24-1795・FAX 0243-24-1796 E-mail info@fukushima-yuuki.net URL http://fukushima-yuuki.net/

活動地域	浜通り（南相馬市・浪江町・富岡町など）および二本松市・旧東和町地区・首都圏
活動分野	・農林漁村中山間

課題・背景

避難解除になったばかりの地域（浜通り）の農業の復興はこれからである。しかし、震災からの時間の経過により福島に関する情報が減る傾向にあり、多くの人の関心が薄れてきている。

目的

農業の多面的機能を活用し、スタディツアーや農業体験を通して首都圏の消費者・支援者との絆を深め、浜通りの農村地帯の再生に活かす。

取組内容・実績

農と食の学校

①藍の学校

藍染体験を苗植えから生葉染、乾燥葉染、種取りまで一貫して行い、農業の面白さを学んだ。

②田んぼの学校

育苗から田植、稲刈り、脱穀までを一貫して行い、稲作の面白さや難しさを学んだ。

浜通りの農家を巡るツアー
①浪江～相馬コース
　浪江から相馬地区の農家を巡り、震災後の復興の苦労などを見学するツアー
②富岡～広野コース
　富岡～広野地区の農家を巡り、復興の進ちょく状況や問題点を体験するツアー

東京交流会兼ツアー同窓会
　それぞれの事業に参加してくれた消費者同士がつながることで、これからの福島県とのかかわり方を共有する。
　また福島県産の農産物を使った料理を堪能した。

事業の成果

　復興状況を発信力のある人に見てもらうことで、福島の復興の進ちょくや課題、対策を多くの人に伝えることができた。
　実際に農家と交流することで、農業の問題を体感できるとともに、農家とのつながりも増え、風評払拭や交流拡大につながった。
　参加者同士のつながりを生むことができた。

今後の展開

　ツアーや学校、さらに交流会でつながった消費者同士が問題意識や目的を共有することで、あらたな福島を応援するコミュニティ（ふくしまをテーマにした多重的なコミュニティ）に発展させていきたい。

久之浜・大久地域づくり協議会

団体概要	活動地域	いわき市
〒979-0333 福島県いわき市久之浜町久之浜字中町32 TEL 0246-82-2111・FAX 0246-82-4412 E-mail hisanohamaohisa@city.iwaki.lg.jp URL http://hisahama.html.xdomain.jp/contents/kyogikai/index.htm	活動分野	・まちづくり ・農林漁村中山間 ・文化芸術スポーツ ・環境保全

課題・背景

かつてこの地域は漁業を核として栄え、漁港に連なる浜の暮らしと水産物の食文化を継承してきましたが、東日本大震災の発生により、まちは甚大な被害を受け、また原発事故に伴う風評被害が未だに根強く残ります。

震災から7年が経過する今日も漁業の完全復活には至っていないことから、これまで地域で培われた漁村文化と魚食文化を絶やさないための取り組みが必要とされました。

目的

地域の基幹産業である漁業の復活と魚食・漁村文化の普及・継承、地場産品の風評被害払拭を目指し、海と山・生産者と消費者の交流を促進しながら、農林水産業の振興と地域の活性化を推進したいと考えます。

取組内容・実績

◇海と山・漁業体験交流会〔平成29年7月23日(日)〕

地域間交流事業の一環として、石川町と地元久之浜・大久地区のこどもたち約90人とその保護者の皆さんそして漁協を初め協力団体の皆さん、約150人の参加により、乗船体験や刺網見学、魚介料理の昼食交流会を行いました。

地場産品展示・紹介・広報事業（石川町産業交流祭）

〔平成29年10月22日（日）〕

地場産品展示・紹介・広報事業の一環として、2017石川町産業交流祭に参加し、「鮭のチャンチャン焼き」の無料提供等を出品して来場者からご好評をいただきました。

雨天にもかかわらず、当協議会のブースには、多くの方が訪れてくださいました。

復興・久之浜漁港まつり2017（魚食・漁村文化普及継承事業）

〔平成29年10月29日（日）〕

魚食・漁村文化普及継承事業の主要イベントとして「復興・久之浜漁港まつり2017」を開催しました。

漁業の完全復活と、水産業の再生振興を目指し、「昔漁村伝承コーナー」や「浜と山のまかないメシ市場」など様々な企画を設けました。

あいにくの雨天となりましたが、サンマ販売や、ステージアトラクションは御来場の方に人気でした。

事業の成果

この事業の企画運営に当たり、漁業・水産業関係者と地域活動団体会員との間で相互交流が促進され、また、協力団体や協力者の間でも、漁業と地域の復興復活に自らも参画・貢献しているとの意識が生じていることが感じ取れました。

この事業は、風評払拭や水産物への安全信頼回復など、一般消費者や農林水産業関係者に対して様々なテーマを提案する催事であると同時に、地域の運営者・従事者自身が事業実施を通じて「気づき」を得る場ともなったので、それによって風評に挫けず復興を推進しようとする気力も増幅されたのではないかと推察できます。

今後の展開

メインの催しのほかにも長期の継続的な取り組みの企画を増やし、協賛者を増やすことで、風評払拭の相乗効果を得られる取り組みに発展させたいと考えています。

催しの中で提供された魚食のレシピや漁村に関する伝承などについて、興味を持っていただいた方々を対象に、さらに詳しく伝えていく文化研究活動へと展開させることができれば、持続的に効果を発現できると期待されます。

NPO法人 団塊のノーブレス・オブリージュ

団体概要	活動地域	東京都（浪江町）
〒169-0051 東京都新宿区西早稲田1-4-14　ラウンジHello内 TEL 090-5798-8393 E-mail uchida@dankai.jp URL http://dankai.jp	活動分野	・社会教育 ・観光振興 ・災害救援

課題・背景

2011年3月11日、津波が浪江町請戸小学校を襲ったが、子ども達全員無事避難できた。この話を残したいと考え、一年目は絵本、二年目は紙芝居上演、三年目は映像化DVDを制作してきた。四年目の今年度は福島を語り継ぐ次世代の育成及び避難体験ツアーの構築を実施した。

更に震災を風化させる事のないようアーカイブ化に向け福島大学との連携や経産省主催の社会起業ツアーに参加し、この請戸小避難の話を語り継ぎたいと考えている。

今年は四年目となるので、浪江町や請戸小学校関係者、福島大学など多くの福島の方々と交流があり、東北大震災の記憶を後世に伝えるべく連携して活動を行った。

目的

1）福島を語り継ぐ次世代の育成
2）請戸小学校物語避難体験ツアーの構築

取組内容・実績

1）福島を語り継ぐ次世代の育成

当時6年生の浪江町出身の大学生に語り部研修を2回受けてもらい、早稲田大学及び上保原小学校で上演してもらった。この様子は朝日新聞等様々なメディアに取り上げられた。

①紙芝居語り部研修1　H29年9月10日実施

紙芝居の語り部はこれまで、我々DNOのスタッフ3名（皆川、黒木、内田）で実施してきたが、今後若い方に継承したいと考え、町出身の大学生にお願いし、彼女が一人前になるために語り部の研修を実施した。研修講師は請戸出身のプロの語り部にお願いした。

②早稲田地球感謝祭　H29年9月18日実施

我らNPOの地元である早稲田大学で毎年9月に開催される祭りに、紙芝居を上演し、学生に初めて語り部をおこなってもらった。

③紙芝居語り部研修2　H30年2月25日実施

伊達市上保原小学校にて紙芝居上演のため、再度研修を実施した。

④上保原小学校紙芝居上演　H30年3月9日実施

約200名の子ども達の前で、紙芝居を上演した。

2）請戸小学校物語避難体験ツアーの構築

①避難体験ツアー調査　H29年8月6日

請戸小学校から大平山へ子ども達が避難した経路を正確に把握するため、当時請戸小教務主任の先生に避難したルートを案内していただいた。請戸小学校の前で待合せ、避難経路をできる限り忠実に歩いた。所々、葦で道がふさがれていたり、工事で入る事ができない場所もあったが、概ね避難経路を把握する事ができた。

紙芝居語り部研修1

早稲田大学紙芝居上演

つなぐ 7
ふるさと紙芝居で伝え
19歳、重荷にせず

朝日新聞朝刊掲載　H30年3月10日

紙芝居語り部研修2

上保原小学校紙芝居上演

請戸小学校から大平山へ下見

②請戸小避難体験ツアー検討会議　H29年10月9日,11月5日、12月3日

8月の避難体験ツアー調査の結果を踏まえ、検討会議を開催し、子ども達に判り易いパンフレットを制作する事となった。パンフレットはツアー時に携帯できるよう防水加工されたものでA3版一枚裏表である事、見開きで見易い事を目標にした。これを実施するに当たりミニプロジェクトを組み、外部から制作のためのリーダーとスタッフ及びパンフレット制作の3名を招聘した。

パンフレット制作
打合せ風景

③パンフレットの制作

A3版で右図のようなパンフレットを制作した。携帯しやすいようにこれを二つ折りにし、一目で請戸小学校から大平山へのルートがわかるようなイラストとなっている。

3月10日は実際にこのパンフレットを携帯して子ども達に歩いてもらった。その結果、おおむね好評だったが、

・イラストが大変判り易く、見易い。
・絵ばかりではなく（折った時の）表紙は請戸小学校が津波に呑まれているリアルな写真であるのがよい。
・難しい漢字があり、また地図の字が小さく読みにくい。などの意見をいただいた。

‘いそげ大平山へ’
パンフレット

④避難体験ツアー　H30年3月10日(下見3月4日)

請戸小学校から大平山へ。パンフレットを片手に子ども達に避難ルートを歩いてもらった。

一人の落ちこぼれもなく、全員大平山に行く事ができた。当時は夕方みぞれ混じりの雪がちらついていたが、この日はほぼ晴れであり、当時よりかなり条件が良かったので全員到達できた。

また、車椅子を経験した子もいて、がたがたで少し窮屈であり、(動いていないので)大変寒かったとの事であった。また、経路をドローンにより空から撮影をした。

請戸小学校から
避難ルート探索

3）福島大学との連携

①うつくしまふくしま未来センター（FURE）　訪問　H29年8月4日

このセンターは震災関連の資料を残すために、平成30年にアーカイブセンターが設置された。

我々は請戸小学校の避難した話を後世に語り継いで行きたいとの思いで、このセンターに昨年作成した映像化DVDと絵本を寄贈した。

今後、福島を伝承してゆく為に、色々な形で連携をして行く事を確認した。

福島大学FUREにて

②福島大学紙芝居上演　H29年11月25日

うつくしまふくしま未来センターからの提案があり、福島大学との連携の一環として紙芝居を上演した。

津波の教訓 紙芝居で伝える

どこに避難 考えるきっかけに

朝日新聞朝刊掲載
H29年12月1日

事業の成果

1.若い方達が活動に共鳴してくれた事

早稲田大学、武蔵野美術大学、上智大学の学生約10名及び「福島しあわせ運べるように合唱団」の子ども約40名の方々に請戸小避難体験ツアーに参加していただいた。当時避難したルートを実際に歩いて、震災の姿を彼ら自身で感じてもらえた。

2.請戸小学校の生徒や先生方とコミュニケーションが取れた事。

避難に重要な役目を果たした先生方や当時6年生の若者にも体験ツアーに参加いただき、子ども達や学生さん等に当時の様子を直に伝える事ができ、良い機会を提供できたと考えている。

3.小学校での紙芝居上演

伊達市立上保原小学校にて紙芝居を上演した。当時請戸小6年の学生に紙芝居の語り部をお願いしたこともあり、子ども達から紙芝居終了後に質問が殺到した。また、校長先生のはからいで、小学6年生全員に紙芝居の感想を書いてもらった。

4.震災遺構としての着実な一歩

請戸小学校の震災遺構化は未定であるが、福島大学のうつくしまふくしま支援センターと協力し、今後アーカイブ化に取り組むようになった。

今後の展開

1.請戸小学校震災遺構に向けた活動

福島大学との連携で、この請戸小学校を震災遺構として是非残していきたいと考えている。これは津波でほとんどが流された中で唯一請戸小学校が残った事及び請戸の子ども達の心の拠りどころとして、小学校しか残されていないという現実があるということにある。もし今後請戸小学校を残すことができるなら、その時に小学校にて展示すべき絵本、紙芝居及びドローンによる空撮を含めた映像ビデオなどのソフトウエアは既に存在しているのでそれらを活かしたい。また避難したルートを経験してみたいとの希望者には今回実施した内容のツアーを企画してさらに充実させたい。紙芝居などは土日に実演することを想定している。

来年度は‘福島を風化させない’との思いで、子ども達が避難したルートが一目でわかるもの、例えば立体的なジオラマのようなものを制作する事及び請戸ミュージカルのようなもので、案であるがこの物語を広めるため多くのメディアを準備するものである。

2.全国及びワールドワイドに展開

福島県の浜通りの話と言う事ではなく、同じ環境／境遇の学校が全国に多く存在する。このような場所で大人や行政のできる事は何か、人災をできる限り除きたい事及びその準備をしてもなお自然災害がやって来た場合、どのような心積りをすれば良いのかなどの原資となるものを提供したい。

特定非営利活動法人 りょうぜん里山がっこう

団体概要	活動地域	伊達市
〒960-0804 福島県伊達市霊山町大石字細倉17 TEL 024-587-1032・FAX 024-587-1082 E-mail info@date-satoyama.com URL http://www.date-satoyama.com	活動分野	・まちづくり ・農林漁村中山間 ・文化芸術スポーツ ・環境保全 ・子どもの健全育成

課題・背景

子どもが少なくて当たり前、商店街や学校が無くなっても当たり前の雰囲気が広がっている。この当たり前に気づき、行動に移さない限り地域は変わらない。

子どもの肥満、不器用さといった体の劣化がひどくなっている。又、いじめ、不登校の心の問題も深刻化している。

中山間地域は住民の高齢化と戸数の減少で自然環境や生活環境が大変な状況になっている。

目的

子どもの体と心を健やかに育てるために地域の高齢者と結びつける活動をする。又、地域の伝統文化に触れる機会を通して、地域の良さを子育て世代が見直していく。

地域と中堅世代が連携して里山環境保全をしながら、野外自然あそびの広がりを実現し、地域活性化につなげていく。

取組内容・実績

地域の伝統文化である霊山太鼓、茶道、華道、みそなどの郷土料理や、近くに古くから伝わるものに触れ、その良さを子育て世代は体験した。その中で、育児の先輩でもある高齢者の話を聞く事で、文化以外の心のふれあいにもつながった。高齢者とつながる事で健康運動士の健康講演会等の活動が増えた。

子どもの心の問題を取り上げ、幼稚園、こども園で心の教室という形でレッスンさせてもらった。命の誕生や喜び、言葉の使い方など、心を育てるレッスンをして欲しいとの要望も高い。

中堅世代が中心になって、里山自然環境の更なる可能性となるボルダリングエリアを見つけ、開拓していった。6月～2月の間に9回、延べ90人近くで開拓整備ワークショップを実施し、草刈り、竹林伐採、雑木伐採、歩道整備、岩場整備などを行った。8月には地区の草刈り作業を住民と一緒に行い、とても助かったと言われた。自然を愛するクライマー側も楽しく岩場づくりができる「縁」を通して、地域住民とつながる良いきっかけになった。

事業の成果

地域とつながる事で、地域の課題がより鮮明に見えてきた。少子高齢化の解決方法は子どもと高齢者を結びつける事。双方のメリットを感じられるイベントや活動が重要。親子レッスン、心の教室の広がり、健康講演会の要望は確実に高まっている。

また、20代から40代の世代がボルダリングを通して、過疎地域と関わることで、地域の人々とお互いに連携するする機会をつくる事ができ、今後の広がりが期待できた。

今後の展開

・地域を変えたいと思う人と強くつながり、地域と共に枠を広げて、たくさんの人に関わってもらう支援をする。人と人をつなぐ役割に徹し、若い世代に活躍してもらえる場の設定もしていきたい。
・公開した里山ボルダリングエリアを通して、クライマー達に楽しく登ってもらい、よそ者と地域住民がお互いにメリットを感じながら協働できるシステムを作りたい。より活気づく地域にするために、多くの方に魅力を与えるボルダリング開拓も引き続き継続していきたい。また、初めての方や子どもでも体験できるように、全天候型の簡易なボルダリングができる人工壁の設置も目指していきたい。

特定非営利活動法人 シャローム

団体概要	活動地域	福島市
〒960-1241 福島県福島市松川町東原17-3 TEL 024-524-2230・FAX 024-525-8285 E-mail info@nposhalom.net URL http://www.nposhalom.net	活動分野	・保健医療福祉 ・社会教育・まちづくり ・災害救援・人権平和 ・子どもの健全育成

課題・背景

原発事故から6年（事業実施当時）、福島の現状は県外へ正確に伝わっておらず、様々な課題が表面化していた。シャロームは、ひまわりの種を福島から全国へ送り収穫した種を福島へ送り返してもらう「ひまわりプロジェクト」を展開してきた。「ひまわりの種」を通して、福島の現状を伝えることをミッションに「ひまわり子ども大使」の派遣を実施することで、福島から発信する地域活性化と風評払拭のための地域間交流を図った。

目的

「ひまわりプロジェクト」に関わる栽培者や支援者の皆さんは福島に関心を持ち、正しい情報を知りたいというニーズが広がっていた。子どもたちの過ごしてきた6年は震災後の生活の記録として重要な意味を持つ。これを子どもたちが直接伝えることで、福島の現状の理解を広げ、交流地の人々への共感を得ていくことで風評を払拭し、福島への社会的な偏見をなくしていくことを目的とした。

取組内容・実績

京都プログラム（7月23日～29日）

大震災と原発事故を振り返り、現状をより正確に発信しようという趣旨です。夏休み初日である7月23日から6泊7日、一般社団法人みんなの手、丹後の自然を守る会、篠山市の村雲まちづくり協議会が快くご協力くださったお陰で、無事盛況のうちに終えることができました。京都プログラムの前半では自然体験も行いました。後半には京都市内に移動し、私立京都橘中学校を訪問。放射線防護学に詳しい先生による特別講義の後、在校生の皆さんとテーブルを囲んでの発表を行うことができました。子どもたちは緊張の面持ちでした。年齢が近いこともあってか、中学生からは活発な質問が寄せられ、福島への関心の高さをうかがわせました。福島からの避難者も生活する兵庫県篠山市では、村雲まちづくり協議会の皆さんが出迎えてくださり、篠山市長も参加しての交流意見交換会が実現しました。

岡山県笠岡市プログラム（8月3日～6日）

今回の大使派遣事業の成果は大きく分けて二つありました。一つは、「子どもたちの明らかな成長が見られた」ということです。最終日のステージ発表では大きな声で「自分の言葉で」自己紹介する子どもたちを見て、驚きと感動がありました。もう一つは「笠岡市内における地域内交流の促進」です。地域間交流による波及効果です。現地の立場の異なる方々がこの事業を通じ、福島の子どもたちの受け入れ体制を整備する過程で何度も顔を合わせ、親睦を深めたとのことです。別れの際には涙を流す子どももいました。子どもたちにとって、忘れられない思い出となったことでしょう。震災から6年以上が経過し、他地域での新たな災害も多くなり、福島の現状を発信する上で、防災・減災について一般化するフェーズに移行していくことが重要となります。日本のこれからを担う子どもたちにとって知るべきことであり、全国の皆さんとも共有するべき大切なことなのでしょう。

鎌倉プログラム（10月13日～15日）

今回参加したのはいわき市在住の小学三年生～五年生の四名です。会場となった建長寺の法堂は国宝建造物。ひまわり栽培で協力してくれている幼稚園児や支援者、イベントへの来場者が伝統と格式のあるステージで作文発表に耳を傾けました。震災当時、2歳～4歳と小さかったために記憶が不鮮明な中、家族内で改めて経験を共有するための振り返りの時間を持つことは非常に有意義でした。その時の保護者の気持ちや不安、その後の震災復興の様子を踏まえ、言葉（作文）には大きな拍手が送られていました。今回参加した子どもたちはフラガールを目指して本格的な練習を積んでおり、フラダンスの発表も行いました。交流していた皆さんのフラダンスに見とれる様は、まるで天上にのぼっていくかのような幸福感に満たされていました。このような発信を続けて未だ復興の途上にある福島への共感を集め、風化を防ぐための一助になったと確信できる事業となりました。

事業の成果

「ひまわり子ども大使」が各地で交流したことで相互理解が促進され、福島への偏見や誤解、無関心が軽減された。子どもたちは家族で体験を振り返り、自己肯定感が養われ、事実を理解し、風評や差別を乗り越える「生きる力」が逞しく育まれたと考えられる。この事業の成果は大きなものと感じた。

「ひまわり子ども大使」は事前の研修でJA直売所や障がい者福祉施設を訪問し、震災以降の様々な努力について学んだ。発表には、福島の人々が重ねてきた努力も紹介されている。

ひまわり感謝祭開催は市民活動を活気づけ、全国で活発な意見交換の機会を提供し、互助的な取り組みが形成された。福島への支援をきっかけに自らの地域の課題を考える新しいネットワークとして機能し始め、次年度以降に繋がる成果を残した。

今後の展開

「ひまわりプロジェクト」のひまわり子ども大使派遣事業により、福島への理解がより進むこととなる。結果的に栽培する地域内や地域間の交流・活性化が促され、命を守り育もうとする福祉の力も伸びていく。子どもたちが一連の活動に参加することで、育ちの芽が豊かに育まれることとなる。共に支え合う福島と全国の繋がりは、地域活性化の一助となり、結果として福島への風評を払拭し、事実に基づいた復興のイメージを向上させる。

特定非営利活動法人 プロジェクトFUKUSHIMA

団体概要
新住所／〒960-8032　福島県福島市陣場町5-30 いげた陣場マンション202号室 H29.6.1時点住所／〒960-0261　福島県福島市飯坂町中野字山岸7番1号 TEL 024-573-8385・FAX 024-573-8386 E-mail profukushima@gmail.com　URL http://www.pj-fukushima.jp/

活動地域	福島市
活動分野	・まちづくり ・観光振興 ・文化芸術スポーツ ・情報化

課題・背景

時間経過と共に複雑化・進化する福島を巡る困難な状況を背景とし、福島の現況を再確認し、どう向き合うか議論することが重要です。その視点と方向性を人々に示唆する力を秘める音楽や詩やアートなど「文化」を生み出すこと、それを継続させることを課題としています。

祭りや独自のメディアによる発信を通して福島から生まれる文化が、福島で希望を持って生きていく原動力となることを目指し、そしてこれからを支えていく若い力を育むことも課題と考えています。

目的

福島から文化を発信し、福島をポジティブな場所に変えていくということを目的に、震災後の福島で様々な活動を続けてきました。今年度も盆踊り、大風呂敷プロジェクト、インターネット放送等の活動を継続しました。

この他、今年度は「スクールFUKUSHIMA!」を定期開催し、原発災害を契機に生まれた様々な問題と継続的に向き合うため、立場や考えの異なる人々が集い、語り合うことで、福島県内のクリエーターや若者の育成をすることも目的としました。

取組内容・実績

フェスティバルFUKUSHIMA!(イベント/盆踊り)

日時:2017年8月15日開催　場所:街なか広場(福島市)

あいにく朝から雨となったが、のべ1,500名ほどの来場者があり、ライブから生演奏での盆踊りまで楽しんでいただきました。会場には多くのボランティアの協力により、パッチワーク様の大風呂敷を敷き、色とりどりに飾り付けたやぐらを設置しました。

スクールFUKUSHIMA!

[第1回]6月29日「福島第一原子力発電所視察」
会　場：福島第一原子力発電所　参加者:19名

[第2回]7月21日「はじまりの美術館のはじまりの話を聴く」
会　場：open space meetthings　参加者：20名
講　師：小林竜也/関根詩織（はじまりの美術館）

[第3回]10月20日「福大生が代々受け継ぐbarをどうしていくのか」
会　場：open space meetthings　参加者：20名
講　師：狩野天（Jam三代目代表)/齋藤 雅輝（Jam三代目副代表）
聴き手：木村衣有子（文筆家）

[第4回]11月2日「キャッサバさんに福島のデザインのお話を聴く」
会　場：open space meetthings　参加者：22名
講　師：キャッサバ（佐藤宏美）

[第5回]12月2日「東京電力第1原子力発電所視察報告会」
会　場：open space meetthings　参加者：10名

[第6回]2月25日「イタリアの家庭料理を作って食べてみよう!」
会　場：アオウゼ調理実習室　参加者：10名
講　師：本田悠(料理研究家)

[第7回]3月18日「小風呂敷ワークショップ」
会　場：福島駅前広場　参加者：11名
講　師：プロジェクトFUKUSHIMA美術部

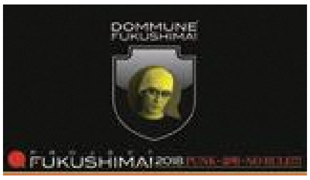
[第8回]3月31日「本町研究会」
会　場：open space meetthings　参加者：25名
講　師：モデレーター：アサノコウタ(プロジェクトFUKUSHIMA)
ゲスト：井桁要(株式会社いげた代表取締役)

インターネット放送局DOMMUNE FUKUSHIMA!

[第1回]「Field Improvisation ～境界を越えて行こうよ♪～」
配信日時：2017年6月16日(金曜日)19:00～24:00
会　　場：Club NEO(福島市)
出　　演：岩根愛(写真家)/キオ・グリフィス(ヴィジュアル・サウンドアーティスト)/山岸清之進(プロジェクトFUKUSHIMA)/小川直人(学芸員)/アヴちゃん(女王蜂)/ANON ID
視聴者数：35,903名 来場者数：57名

第2回「フェスティバルFUKUSHIMA!2017」
配信日時：2017年8月15日(火曜日)19:00～24:00
会　　場：Club NEO(福島市)
出　　演：岩根愛(写真家)/懸田弘訓(民俗学者)/伊藤美枝子(双葉盆唄 唄い手)/廣木隆一(映画監督)/大友良英(音楽家)/山岸清之進(プロジェクトFUKUSHIMA)/リクルマイ& The K/ロボ宙/テニスコーツ
視聴者数：28,919名 来場者数：46名

第3回「PUNK･盆唄･NO RULE!!!」
配信日時：2018年2月4日(日曜日)19:00～24:00
会　　場：Club NEO(福島市)
出　　演：遠藤ミチロウ/岩根愛(写真家)/山岸清之進(プロジェクトFUKUSHIMA)
視聴者数：15,727名 来場者数：37名



毎年県内外の多くの人々に視聴される独自のインターネット放送局。今年は“福島から発信すること”の重要性を再認識し、福島市を拠点に継続的に番組配信を3回行いました。

事業の成果

フェスティバルFUKUSHIMA!

フェスティバルには毎年県内外から多くの方が参加してくださっています。その方々の地域への経済的貢献度は高いです。(宿泊、飲食など)また、昨年度からフェスティバル当日に福島駅前で行っている地元野菜などのマルシェの実行委員会からは、売上げは順調との声をいただいています。

スクールFUKUSHIMA!

地元で活動している方を講師としてお招きすることにより、その方の活動に興味を持ち新たな活動に繋がった方も多かったです。活動全体を通して、経済的にどの程度の波及効果があったかを算出することは難しいが、貢献していると考えています。

インターネット放送局DOMMUNE FUKUSHIMA!

3回の放送を通して、80,000人もの視聴者数となりました。福島市で開催するイベントでありながら、全国各地、世界中に情報を発信する媒体として機能していたと考えます。

今後の展開

フェスティバルFUKUSHIMA!

来年度は雨によるリスクを減らす解決策の一つとして2days開催する予定です。盆踊りや音楽のイベントの他にも、新たなプログラムにも挑戦していきたいです。

スクールFUKUSHIMA!

講師、スタッフの日程調整のため開催が遅れることが多いので、企画時期を早めるなど計画的に準備をしていく必要がある。月1回の開催を引き続き目標としていく。また開催の告知、開催後の記録にも力を入れていきます。

インターネット放送局DOMMUNE FUKUSHIMA!

インターネット放送をきっかけとして、実際に福島に足を運んでもらえる機会などが増えるように、今後も継続して情報を発信していきたいと考えています。

一般社団法人 Bridge for Fukushima

団体概要	活動地域	福島県内
〒960-8061 福島県福島市五月町2-22 TEL・FAX 024-503-9069 E-mail info@bridgeforfukushima.org URL http://bridgeforfukushima.org/	活動分野	・まちづくり ・子どもの健全育成

課題・背景

本県では、震災以降NPO法人の設立が激増し平成28年末時点で898のNPOが認定、またNPOのみならず一般社団法人や任意団体も増加しています。そんな中法人・団体に求められるのは、会計の透明性とともに活動自体の質の向上と考えます。海外で開発援助等の事業を行う際には総事業費の3～5%で外部評価を受け「質」の向上を図っているところ、国内ではそういった仕組みがなく、またNPO向けの外部評価を行える団体も県内では皆無です。

目的

復興を行う団体は行政や助成団体から資金を得ていましたが、2013年に比べると数も金額も半分以下に減少しています。外部評価を行い活動の見直し、事業の効率・成果の最大化を図り、それによって団体自体の資金獲得力や認知度を上げる事ができます。更には2019年から助成開始予定の「休眠預金」においては、活動に準ずる評価が行われることが議論されており、県内のNPOが休眠預金にアクセスしやすい環境を作ることは急務と考えます。

取組内容・実績

- 県内の6つの団体を対象に、SROI評価に必要となるロジックモデルを当団体の職員が作成し、評価を行いました。

ロジックモデルとは、事業や組織が最終的に目指す変化・効果の実現に向けた道筋を体系的に図示化したもので、事業の設計図に例えられます。1事業が、どのような道筋で目的を達成しようとしているのかの仮説を示したもの、ないし戦略を示

したもの、とも言えます。
ロジックモデルは一般的に、既に説明したアウトカム、アウトプット、活動、インプットを矢印でつなげたツリー型で表現されます。

● 評価に関心がある団体向けに、評価に関するワークショップを開催しました。

ロジックモデルを使うことで、評価が行いやすくなるとともに、活動「実績」と活動「成果」が異なる点などについて詳しく学ぶワークを実施しました。

更に評価にあたっては、JICA等国際機関が行政事業評価を行っている評価手法（プロジェクト・サイクル・マネージメント）や、外部評価と自己評価の違い等についても見識を深めました。

事業の成果

ロジックモデルを作成することで、内部では見落とされていた活動の成果や、実現したい社会の姿を可視化することができたとのコメントを多くいただきました。
また休眠預金や企業のCSR活動等においてもロジックモデルは話題になってきているところで、作成した団体さんからは今後のファンドレイズに非常に役立つとの声をいただきました。
また団体内では、実際に評価を行ったことで、知識が蓄積されまた作成した団体さんからのフィードバックも高かったことから、来年度以降の活動に道筋がつきました。

今後の展開

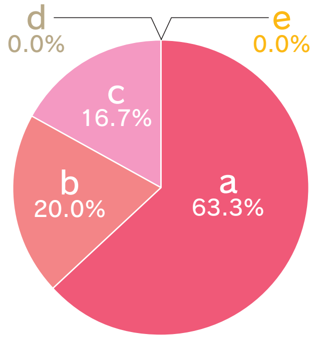
可能であれば、来年度はスーパーバイズがなく当団体の職員が、12団体に向けて評価を行いたいと考えています。
また一般的国際NPOでは事業評価やロジックモデル作成においては、事業費の3%程度をかけることが多く、それにより活動がより効果的に行われると考えられており、そのような文化が根付くように活動を行っていきたいと思います。

平成29年度
ふるさと・きずな維持・再生支援事業
アンケート調査結果

実施団体数：30団体

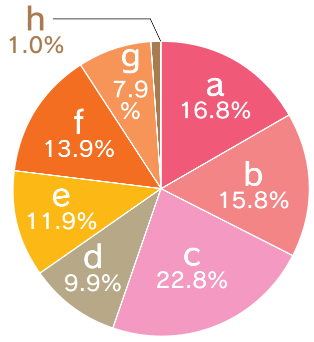
1 ふるさと・きずな維持・再生支援事業(以下「きずな事業」という)はどのような活動を展開したものですか？

a	今までの活動の一部内容を発展させたもの	63.3%
b	今までの活動の範囲を拡大したもの	20.0%
c	新しい活動として取り組んだもの	16.7%
d	他団体の既存活動を継承したもの	0.0%
e	その他	0.0%



2 きずな事業ではどのような団体と連携しましたか？（複数回答可）

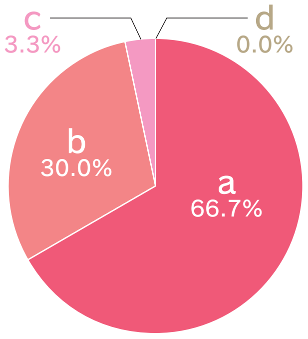
a	行政	16.8%
b	NPO法人	15.8%
c	任意団体(ボランティア、地縁組織等)	22.8%
d	公益法人(財団法人、社団法人等)	9.9%
e	経済団体(商工会、商工会議所等)	11.9%
f	企業	13.9%
g	教育機関（大学等）	7.9%
h	その他	1.0%



■ その他意見
・ちょんまげ隊

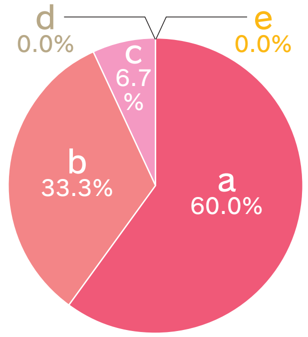
3 きずな事業では他の団体と上手く連携することはできましたか？

a	各主体の特性を十分に生かすことができた	66.7%
b	各主体の特性をある程度生かすことができた	30.0%
c	各主体の特性をほとんど生かすことができなかった	3.3%
d	その他	0.0%



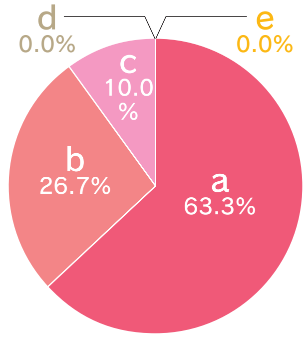
4 きずな事業では地域住民の理解は得られましたか？

a	十分に理解や共感が得られた、又は、多くの参加もあった	60.0%
b	ある程度の理解が得られた、又は、一部の参加もみられた	33.3%
c	一定の理解が得られた	6.7%
d	あまり理解は得られなかった	0.0%
e	その他	0.0%



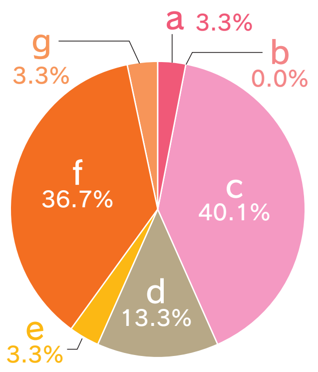
5 きずな事業で実施した取組について、目標は達成できましたか？

a	概ね目標を達成できた	63.3%
b	目標の７～８割程度は達成できた	26.7%
c	目標の半分程度は達成できた	10.0%
d	目標の一部を達成できなかった	00.0%
e	その他	00.0%



6 きずな事業で実施した取組について、改善すべき点はありましたか？

a	地域のニーズに合致していなかった	3.3%
b	関係機関の協力が得られなかった	0.0%
c	事業期間が足りなかった	40.1%
d	需要が大きくカバーしきれなかった	13.3%
e	当初の事業計画、実施体制に無理があった	3.3%
f	その他	36.7%
g	無回答	3.3%

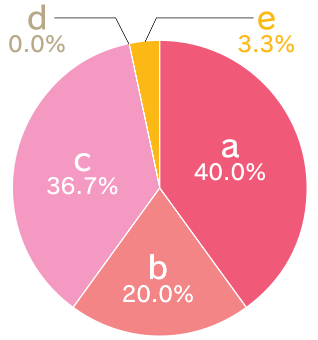


■ その他意見

・人材がもっとほしい。
・おおむね計画通りだった。
・一部天候などの影響を受けた。
・もう少し事業規模を大きくすべきだった。
・計画に甘さがあったことは反省事項。
・特にはなかった。
・港区での事業は集客の検討が必要。
・情報発信が少し足りなかった。
・天候不順への備えが少し足りなかった。
・提携団体からのオファーが増え、活動の規模が広がりすぎたために、本来の「チャリティカフェ」の準備に掛ける時間が少なくなってしまった。
・福島の子どもたちの成長「生きる力」の育み。

7 きずな事業終了後、その取組については継続しますか？

a	事業を拡大して継続する	40.0%
b	同様の取組を継続する	20.0%
c	一部手法や内容を変更して継続する	36.7%
d	継続しない	0.0%
e	その他	3.3%

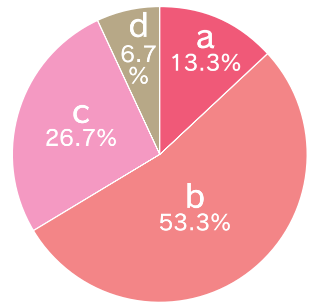


■ その他意見

・地球の環境保全活動を拡大、ボランティアの拡大、継続する。

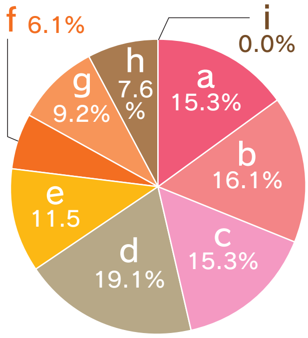
8 きずな事業の取組の継続について、資金調達の予定はどうですか？

a	必要な資金はほぼ調達可能である	13.3%
b	必要な資金の一部は調達可能である	53.3%
c	必要な資金の調達の目途は立っていない	26.7%
d	その他	6.7%



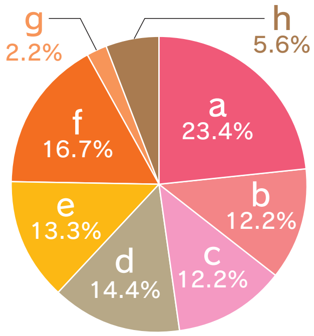
9 きずな事業の取組みの継続・発展に必要なものは何ですか？(複数回答可)

a	事業に協力してくれる人材の確保・育成	15.3%
b	行政による側面支援	16.1%
c	他の主体(地域住民、ＮＰＯ、企業等)との協力・連携	15.3%
d	補助金・助成金の充実	19.1%
e	会費･寄付の増加	11.5%
f	自主事業の拡大	6.1%
g	地域資源の活用	9.2%
h	専門的知見やノウハウの取得	7.6%
i	その他	0.0%



10 きずな事業を実施した成果として何が挙げられますか？（複数回答可）

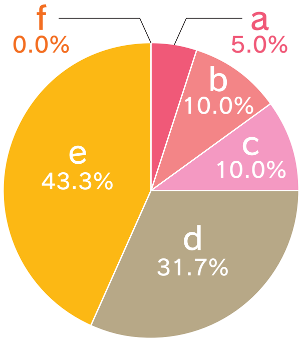
a	様々な団体とのネットワークができた	23.4%
b	地域課題に取り組む人材が育った	12.2%
c	専門的なノウハウ等が習得できた	12.2%
d	効果的な事業立案･実施が可能となった	14.4%
e	住民主体の活動につながった	13.3%
f	地域資源を活用することができた	16.7%
g	新たな起業や雇用の創出につながった	2.2%
h	その他	5.6%



■ その他意見
・風評被害払拭
・次世代へ向けた取組の機会となった。

11 きずな事業を実施後、団体組織として変化したことはありますか？（複数回答可）

a	会員数が増えた	5.0%
b	寄付が増えた	10.0%
c	スタッフが増えた	10.0%
d	支援者が増えた	31.7%
e	団体の知名度が高まった	43.3%
f	その他	0.0%



12 きずな事業の実施において、特に苦労した点は何ですか？（自由記載）

- ガソリン代の値上がり。
- 人材不足。
- スタッフ・講師を集めること。
- 今回初めて、当該補助金を獲得したため、当初は会計などの面で不明な点があったが、事業を進めていく中で理解できた。
- 精算になるまでの活動資金の確保。
- 1年間の事業であった為、期間内に予算変更や活動内容変更の必要が発生した。その都度、確認→事務手続き→許可→実施というプロセスとなったことで、当然必要な手続きではあるが、現地のニーズにスピーディに対応できなかった。
- 帰村初年度ということもあり村の行政も住民も多忙で、前年度までと比較してイベント時期や人材調整等に苦労した。
- 特に9月に実施したイベント事業について特化すれば、スイス大使館との調整から始まり、公官庁（県知事・市長・議長、車両・航空展示の関係機関）との交渉、来賓や来場者への「おもてなし」。
- 広範な地域をまわりながらの活動であったため、外勤と内勤（経費管理等の事務処理）のバランスをうまく取るのが難しかった。
- 小学生を対象としたキャリア教育について、必要性を漠然と感じてはいるもののまだ早いのではないかとの意見が多く、理解していただくまでに時間がかかった。
- 一般の方への参加広報。いままでの勉強会に参加したことのない新たな参加者へのアプローチ方法。
- いかに、福島県の現状を伝えるか、ということ。その内容の選択や表現の方法など。
- 労力的に参加人員350人レベルのイベント事業で事務局一人での対応は非常に厳しい。
- 専門的知識不足を痛感した。
- 会計をきちんとすることに気を使いました。
- 実施事業が多く、ボランティアスタッフ呼びかけの時間が少なくなってしまい、イベントごとのスタッフの負担が大きくなってしまったように思います。
- 行政の補助事業は始めてのことで、経理業務がこれまで以上に量的に多く、人的、物理的に時間、コストを要した点。
- 港区での開催時期が県内から招聘する合唱、吹奏楽の日程の関係で集客の難しい時期になってしまう点。
- これからの福島の復興・地域再生を担う地域活動団体をつなぎ、発信力を高めることを目指してこの事業に取組んだが、県内7方部に積極的かつ継続した活動を行う団体を訪ね、インタビューを行うことが短期間ではなかなか難しかったこと。
- 上記団体などの声を聴きながら、日頃の組織運営上、大きな課題となっているテーマを取り上げ、勉強会を県内3ヶ所で開催したが、参加者募集に苦戦したこと。
- 高齢者のペット飼育への批判もあるため、情報発信の際に表現等に苦労しました。また、高齢者

を狙った犯罪が多いため、プライバシーに配慮しました。

- 複数の団体(地域)からの開催希望があったが、時期と予算の都合を勘案して一箇所に決めなければならず、要望に応えきれなかった。
- 首都圏への情報発信(参加者募集、その後の広報)。その効果の検証の方法を思案中です。参加者向けフォローアップの会は実施します。
- イベント(集客)事業については天候の影響が大きく、効果の程度も来場者数によって左右されることのほか、実施・中止の見極めや、延期・中止の場合の代替手段の確保の難しさがあり、雨天決行した場合の予定の出費増などについて、事前に全てを想定して対応策を講じておくことまではできませんでした。
- 当初予定していた活動を実施するに当たり、色々な事態が発生した事。例えば、避難解除区域以外には入れないため、子ども達が避難したルートをたどる事ができない。また、福島大学との連携に於いて、アーカイブ化にあたり、今後両者で詰めなければならない課題が山積している事など。
- 新しいことをする上で、マイナス面を列挙され前に進めないことがあった。試してもらえる機会をつくれば理解してもらえるが、試してもらう上でのこちらのスキル向上は必須。又、新しいものを生み出すアイディア力は特に必要。
- 定期開催のイベントを継続することに苦労した。講師、スタッフの日程調整のため開催が遅れることが多いので、企画時期を早めるなど計画的に準備をしていく必要がある。
- 特に無し。大変有意義に活動できました。また、内堀知事にご来校いただけたことで、励みになりました。
- 概算払いの請求書の作成等は、はじめてのこともあり苦労した。しかし、担当していただいた方がわかりやすく説明していただけたのでとても助かりました。
- 自主財源の確保と煩雑な書類。
- オープンデータブックの作成に非常に苦労しました。データの選定/収集/解析等に関して、掲載項目が偏らず、且つ課題等の状況を明確にするのに時間がかかりました。また、データの内容を読み解くために多くの方々へのヒヤリングや資料の収集にも苦労しましたが大変勉強になりました。
- 県外の各連携団体との打ち合わせ。引率者の確保。引率中の子どもたちの安全・見守りには細心の注意を払いました。

13 復興支援・被災者支援活動において、現在、特に課題となっていることは何ですか？（自由記載）

- 風化！県外だけでなく、県内でも関心が薄くなってきていること。当法人は農家の応援活動をしているが、未だに福島産の野菜は絶対に食べないという人が、県外のみならず、県内にもいる。その人たちは、国や行政が嘘の発表をするので、どんな情報も信じない、危険なものには近寄らない、というスタンスである。
- 避難者・帰還者のコミュニティの再興。
- 避難者・帰還者の孤立化防止策。
- 活動における資金調達。
- 都会と被災地の交流をさらに活発化させ、被災地が抱える問題が共通の課題、全国の共通の問題であるとの認識を広めることが課題だと考えている。
- 人材の確保。支援団体、行政、地域の組織（商工会など）において人材不足が見られ、目の前の業務に追われることで、発展的な展開まで踏み込めないように感じる。
- 人材を確保する為の安定した運営基盤づくり、経済的な自立の仕組み。
- 事業を行うためには人材が、人材を確保する為には事業（収入）が必要であり、それらを成しえる為、団体の運営基盤を改めてしっかり構築する必要性を感じる。
- 帰村者が1割にも満たない状況の中、村内と村外を結ぶ事業の企画と、それぞれの生活拠点でのコミュニティ形成のための支援。
- 風評被害払拭には県外の方々に福島県の現状を知っていただくのはもちろんだが、地元住民が正しく復興状況（風評の原因等）を把握し、来県される方々に来て良かったと感じていただけることが重要。そのために住民自ら「おもてなし」を実践と啓発活動の主体者であるという意識改革が必要だ。
- 中長期にわたる活動を中間支援組織として支えていくための、効果的な社会的資源（資金、人材、ノウハウ等）の供給。
- 震災から7年が経ち、復興について少しずつ意識が薄れてきていること。
- 資金と協力してくれるスタッフの確保。
- やりたいことはたくさんあるが、当NPOは主に首都圏の消費者をターゲットにしているため、活動資金がかかる。
- 原町区の大谷地区は避難勧奨指定が30世帯中17世帯も指定され平成29年12月現在27世帯が戻ったが、高齢者が8割を超え過疎化が進む過疎集落になっている。なぜ地域に若者がいなくなったかといえば放射線が高かったために子ども、孫たちは県内外へ避難した。原発事故から7年が経過、子ども達や孫は避難先での生活のために職に就き、孫達も大きくなり、学校、幼稚園等々に入学、ますます地元への帰還が隘路のため若者がいなくなってしまった。残った高齢者だけでは農業ができなくなり特に田圃は壊滅的な状態となっているのが現実である。そこで復興支援事業で小さな山間部の過疎集落地域での耕作放棄地を少しでも防ぐため「きずな事業」等で助成事業を考え、進めてほしい。

- 復興という言葉を徐々に使わなくなってきている。とはいえ、元に戻っているわけでもなく、転換期を迎えているのかもしれない。新しい地域作りとしてとらえ、かつての町よりもより良い町にできればよいと思う。
- 当初、活動場所は主として仮設住宅であったが、昨年3月避難解除となり飯舘村内での活動をも開始する必要性が生じ、佐須地区での活動をスタートし拠点が増えた。さらに仮設住宅で当会の活動を利用されていた方が帰村されはじめ、村内の他地区や、村の施設などを使って同種の活動をぜひやってほしいとの希望を聞いている。今後、村内に戻られる方々の健康や見守りをしていくために、今まで以上に老人会や民生委員、社協、そして自治体のご理解とご協力をいただき、支援活動を継続して行ければと願っています。
- 震災後、沿岸部である中之作地域は人口減少、高齢化に拍車がかかっています。また、地域のコミュニティの場でもあった個人商店が相次いで閉店しています。地域の方が気軽に立ち寄れるコミュニティの場所づくりが課題になっていると思います。
- 次世代へと活動をバトンタッチしていくための若い世代の養成とネットワーク及び啓蒙、啓発。福島県、首都圏、全国とのより広いネットワークの必要性。
- 震災から5年辺りを契機に民間助成金等の財源的支援が一定の区切りをつけ始めた一方、震災以前・震災後の多様な地域課題を解決しようとする地域活動団体が、自らの組織運営上の課題や団体の体力に不安を抱いたり、疲弊が見られたりしていること。
- 特に県北・県中・相双・いわき地域において、復興（災害）公営住宅団地と地元とが新たに取組む地域コミュニティの支援を担う体制が脆弱であり、自治体はもちろんだが、地域活動団体や市町村社協、地縁団体等が協働しながら面で支える仕組みづくりが急務であること。
- 福島への全国のイメージ、原発避難者へのイメージと感情、自主避難者へのイメージと感情がある時点で固定され、そのままインプットされて進化していない。交流を通じて、負の印象や感情を変化させることが課題と思います。
- 地域住民に関心を持ってもらう。
- 問題意識を持つ人だけではなく、色々な立場の方々による、参加型のお話会にしていきたい。
- 生産者と首都圏の消費者とのつながりや関係性の構築を目標としているが、その発展など。
- 次世代への活動継承に関して、若年層の活動参加が望まれますが、仕事や家庭のことで忙しく、地域活動に充てる時間がなかったり、あるいは若年層の人数そのものが決して多くない現状において、長期的な復興まちづくりの担い手の確保と育成が最大の課題と言えます。
- ‘災害の風化’ こちら首都圏では、7年も経過しているため、まことに残念であるが震災の事は普段全く念頭にない。少なくとも、請戸小学校の子ども達全員があの中で助かった事実を風化させてはならないと考えている。
- 福島では全国先駆けの課題が、ここ10年でやってくるのではないかと思う。その中で、できることを見つけ、挑戦していく人材の育成と金銭面や社会的信頼面でのフォローする団体が必要。人材育成は、すぐに形や結果に結び付かないかも知れないが、子どもや若者を育てるための支援として必要。

- 継続させること。創り上げた「文化」を多くの人々に閉じずに開き続けること。また、スタッフや参加者に若い人材が増えるように育成を課題としていきたい。
- 場所。自由に利用できる広場やサッカー場がないため、気軽に招集することができないこと。
- 被災者が県内外で暮らしているため、遠方の反響を知る手だてがない。
- 支援活動自体で、活動を継続させるための資金を生み出すシステムがうまく構築できていないのが課題です。
- 活動資金の調達。人材の確保。
- 集中復興期間後のファンドレイジング。

成果報告
交流会

平成29年度

ふるさと・きずな維持・再生支援事業

成果報告交流会

開催日時 平成 29 年 3 月 20 日（火）

会　場 杉妻会館　4 階洋大会議室（牡丹）
福島県福島市杉妻 3 − 45

目　的 　NPO 法人等が被災者同士、被災者と支援者等を結びつける「絆力」を活かして実施する、震災からの復興支援活動等を支援することにより、本県のきずなの維持･再生を図るものです。

プログラム

13：00 ～ 13：05	開会（挨拶 等）
13：05 ～ 15：05	成果報告発表
15：15 ～ 15：35	来年度の NPO 関連事業の説明（文化振興課）
15：35 ～ 16：00	交流会（参加者交流・名刺交換 等）
16：00	閉会

発表団体

特定非営利活動法人 福島やさい畑～復興プロジェクト
学校法人 山口学園 ECC 国際外語専門学校
NPO 法人 かわまたスポーツクラブ
特定非営利活動法人 南相馬サイエンスラボ
特定非営利活動法人 元気になろう福島
いいたてまでいの会
特定非営利活動法人 ふくしま飛行協会
一般社団法人 ふくしま連携復興センター
特定非営利活動法人 未来ノチカラ
特定非営利活動法人 SORA アニマルシェルター
特定非営利活動法人 がんばろう福島、農業者等の会
特定非営利活動法人 フー太郎の森基金
特定非営利活動法人 表郷ボランティアネットワーク
特定非営利活動法人 ふくしま再生の会
NPO 法人 中之作プロジェクト
特定非営利活動法人 Social Net Project MOVE
特定非営利活動法人 ふたば創造未来塾
特定非営利活動法人 相馬はらがま朝市クラブ
特定非営利活動法人 市民公益活動パートナーズ
特定非営利活動法人 白河花里倶楽部
NPO 法人 ふくしま 30 年プロジェクト
特定非営利活動法人 ツークンフトロカール
特定非営利活動法人 Wunder ground
特定非営利活動法人 福島県有機農業ネットワーク
久之浜・大久地域づくり協議会
NPO 法人 団塊のノーブレス・オブリージュ
特定非営利活動法人 りょうぜん里山がっこう
特定非営利活動法人 シャローム
特定非営利活動法人 プロジェクト FUKUSHIMA
一般社団法人 Bridge for Fukushima

平成29年度
ふるさと・きずな維持・再生支援事業
成果報告交流会

平成29年度
ふるさと・きずな維持・再生支援事業

成果報告交流会

どなたでも参加できます

参加無料

開催日時 平成30年 3月20日(火)
13:00～16:00(12:30より受付)

会場 杉妻会館 4階 洋大会議室(牡丹)
〒960-8065 福島県福島市杉妻町3-45
TEL 024-523-5161(代)
•福島駅から徒歩10分
•市内循環バス「大町」下車、徒歩5分
•東北自動車道「福島西I.C」から車で約10分

「ふるさと・きずな維持・再生支援事業」により実施された復興支援・被災者支援等の活動について紹介します。

平成30年度のNPO関連事業の説明もあります!

「復興の礎はいまここに、一歩、一歩」

プログラム

13:00～13:05	開会(挨拶 等)
13:05～15:05	成果報告発表
15:15～15:35	来年度のNPO関連事業の説明(文化振興課)
15:35～16:00	交流会(参加者交流・名刺交換 等)
16:00	閉会

※会場内に各団体の活動紹介のパネルを展示します。 ※プログラムの内容・時間は予告なく変更になる場合があります。

今年度採択団体 (30団体)

特定非営利活動法人 福島やさい畑～復興プロジェクト／学校法人 山口学園ECC国際外語専門学校／NPO法人 かわまたスポーツクラブ／特定非営利活動法人 南相馬サイエンスラボ／特定非営利活動法人 元気になろう福島／いいたてまでいの会／特定非営利活動法人 ふくしま飛行協会／一般社団法人 ふくしま連携復興センター／特定非営利活動法人 未来ノチカラ／特定非営利活動法人 SORAアニマルシェルター／特定非営利活動法人 がんばろう福島、農業者等の会／特定非営利活動法人 フー太郎の森基金／特定非営利活動法人 表郷ボランティアネットワーク／特定非営利活動法人 ふくしま再生の会／NPO法人 中之作プロジェクト／特定非営利活動法人 Social Net Project MOVE／特定非営利活動法人 ふたば創造未来塾／特定非営利活動法人 相馬はらがま朝市クラブ／特定非営利活動法人 市民公益活動パートナーズ／特定非営利活動法人 白河花里倶楽部／NPO法人 ふくしま30年プロジェクト／特定非営利活動法人 ツークンフトロカール／特定非営利活動法人 Wunder ground／特定非営利活動法人 福島県有機農業ネットワーク／久之浜・大久地域づくり協議会／NPO法人 団塊のノーブレス・オブリージュ／特定非営利活動法人 りょうぜん里山がっこう／特定非営利活動法人 シャローム／特定非営利活動法人 プロジェクトFUKUSHIMA／一般社団法人 Bridge for Fukushima

※上記のなかで当日、悪天候等により報告できない団体がある場合もございます。

申込方法 電話・FAX、またはHPの入力フォームより事前にお申し込みください。
※詳しくは裏面をご覧ください。

お問い合わせ先 ふるさと・きずな維持・再生支援事業 事務局
(ふくしま地域活動団体サポートセンター内)
〒960-8043 福島県福島市中町8番2号 福島県自治会館7階
TEL 024-521-7333 FAX 024-523-2741
E-mail kizuna@f-saposen.jp URL https://f-saposen.jp

主 催／福島県 事務局／ふるさと・きずな維持・再生支援事業 事務局(ふくしま地域活動団体サポートセンター内)

平成29年度
ふるさと・きずな維持・
再生支援事業

成果報告交流会のようす

分科会　A

分科会　B

来年度事業説明会

パネル展示

交 流 会

平成29年度
ふるさと・きずな維持・再生支援事業
活動成果報告書

平成30年3月31日発行

発　　行　福島県企画調整部文化スポーツ局 文化振興課
〒960-8670 福島県福島市杉妻町2-16（県庁西庁舎11階）
電話 024-521-7179　FAX 024-521-5677

運営受託　認定特定非営利活動法人 ふくしまNPOネットワークセンター

事 務 局　ふくしま地域活動団体サポートセンター
〒960-8043 福島県福島市中町8-2 福島県自治会館7階
電話 024-521-7333　FAX 024-521-2741

ふるさと・きずな維持・再生支援事業

ふくしまから はじめよう。

キビタン